

博多 27

— 博多遺跡群第48次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第282集

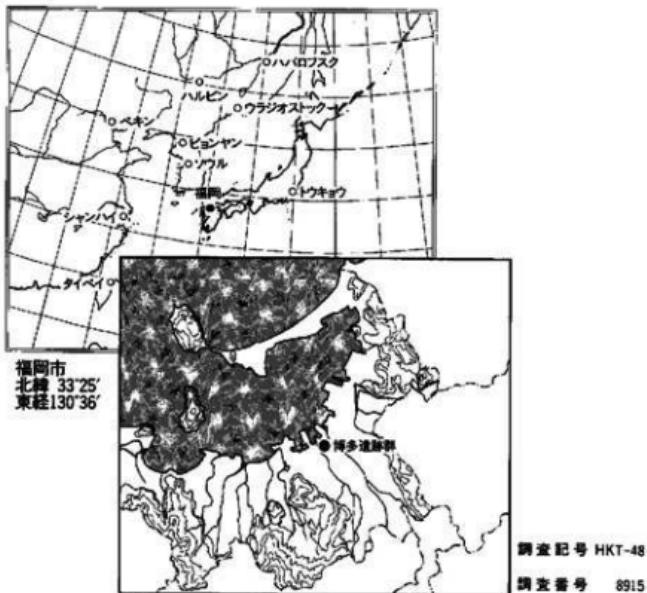


1992

福岡市教育委員会

博多 27

—博多遺跡群第48次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第282集



1992

福岡市教育委員会

序

国際都市「FUKUOKA」を標榜する我が福岡市は、現在21世紀へむけて文化と緑の町づくりへ努力しているところです。この福岡を代表する遺跡のひとつに博多遺跡群があります。博多の町は、古来より大陸への窓口として、我が国の歴史上重要な役割を担ってまいりました。これは、これまでの80余回にわたる発掘調査の成果が物語っています。

さて、ここに第48次調査の発掘調査の成果を上梓いたしますが、この調査では、中世博多の町割りを示す溝や町家の発見や本遺跡群で最も古い弥生時代中期の住居址を検出するなど、貴重な成果を上げることができました。

本書が市民の皆様の地域の文化財に対する御理解を深めるとともに、学術研究の分野で活用されることを望みます。

最後になりましたが、今回調査にあたり御協力いただいた株式会社高木不動産ならびに高木工務店、調査から整理にいたるまで御指導・御協力いただいた指導委員の諸先生や関係各位の皆様に感謝申し上げます。

平成4月1月13日

福岡市教育委員会
教育長 井 口 雄 哉

例　　言

1. 本書は、マンション建設に先立ち、福岡市教育委員会が実施した博多遺跡群の第48次調査（福岡市博多区御供所町40・41番）の報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、小畠弘己が行った。
3. 本書に使用した遺構実測図は、小畠・内海武則・川上洋一・中村啓太郎が、遺物実測図は、小畠・撫養久美子・白井和子が作成した。また、製図には、小畠・撫養・中村元子があたった。
4. 本書に使用した遺構・遺物写真は、小畠が撮影した。
5. 遺物の整理にあたっては、森本朝子（陶磁器）、佐伯弘次（歴史文献）、櫻木晋一（銅錢）、大庭康時（調査一般）の各氏から有益なご助言をいただいた。
6. 本書で用いた遺構番号は調査時に用いた通し番号（略号M）を用いている。
7. 本書に用いた方位は、実測図・本文ともに磁北を用いている。
8. 本調査報告書に関するすべての記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

遺跡調査番号	8915		遺跡略号	HKT-48	
調査地地番	福岡市博多区御供所町40外		分布地図番号	天神49	
開発面積	473.59m ²	調査対象面積	270m ²	調査実施面積	263m ²
調査期間	1989年5月16日～1991年8月1日				

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
第二章 遺跡の歴史的環境と調査区の位置.....	2
第三章 調査の成果.....	5
1. 各遺構面の概要.....	5
2. 近世以降の遺構と遺物.....	9
3. 中世・古代末の遺構と遺物.....	13
(1)中世Ⅰ期.....	13
(2)中世Ⅱ期.....	16
(3)中世Ⅲ期.....	41
(4)中世Ⅳ期.....	49
(5)包含層・その他の遺構出土陶磁器.....	57
4. 石製品.....	60
5. 土製品.....	66
6. 金属製品.....	68
7. 銅錢.....	69
8. 弥生時代の遺構と遺物.....	72
第四章 まとめ.....	79

挿図目次

Fig. 1 既往の調査と第48次調査区の位置図 (1/9000)	3
Fig. 2 調査区と周辺測量およびグリッド配置図 (1/1000)	4
Fig. 3 I面検出遺構全体図 (1/200)	5
Fig. 4 II・III面検出遺構全体図 (1/200)	6
Fig. 5 IV面検出遺構全体図 (1/200)	7
Fig. 6 第3・4・10・12号埋甕遺構実測図 (1/40)	10
Fig. 7 第18号石組遺構・19号集石実測図 (1/40)	11
Fig. 8 近世陶磁器実測図 (1/4)	12
Fig. 9 第23号溝土層断面実測図 (1/40)	13
Fig. 10 第108・181号井戸実測図 (1/40)	14

Fig.11	第23号溝・108号井戸出土遺物実測図（1/4）	15
Fig.12	第66号井戸実測図（1/40）	16
Fig.13	第107号井戸実測図（1/40）	17
Fig.14	第137号井戸実測図（1/40）	18
Fig.15	第139・180号井戸実測図（1/40）	19
Fig.16	第107・137・139号井戸出土遺物実測図（1/4）	20
Fig.17	第11・30・40・67号遺構実測図（1/40）	21
Fig.18	第11・30・40・67号遺構出土遺物実測図（1/4）	23
Fig.19	第31・32・33・34・37・38・93号土壤実測図（1/40）	24
Fig.20	第31・32号土壤出土遺物実測図（1/4）	27
Fig.21	第33号土壤出土遺物実測図（1/4）	28
Fig.22	第34・37・38・93号土壤出土遺物実測図（1/4）	29
Fig.23	第28・35・90・100・125号土壤実測図（1/40）	31
Fig.24	第24・25・28・35・104号土壤出土遺物実測図（1/4）	33
Fig.25	第90・100・102・105・125号土壤出土遺物実測図（1/4）	34
Fig.26	第94・95・96・97号遺構実測図（1/40）	37
Fig.27	第29・36・82・94・95・96号遺構出土遺物実測図（1/4）	38
Fig.28	第26号遺構・81号掘立柱跡実測図（1/40・1/80）	40
Fig.29	第290・300号溝出土遺物実測図(1)（1/4）	42
Fig.30	第300号溝出土遺物実測図(2)（1/4）	43
Fig.31	第300号溝出土遺物実測図(3)（1/4）	44
Fig.32	第64・291号井戸実測図（1/40）	46
Fig.33	第120号土壤実測図（1/40）	47
Fig.34	第64・141号井戸・119・120・126号土壤出土遺物実測図（1/4）	48
Fig.35	第127・249・251・252・280号土壤実測図（1/40）	50
Fig.36	第127・138・165・250・251・252号土壤出土遺物実測図（1/4）	52
Fig.37	第249・280・282・283号土壤出土遺物実測図（1/4）	53
Fig.38	第121号土壤出土瓦実測図(1)（1/4）	55
Fig.39	第121号土壤出土瓦実測図(2)（1/4）	56
Fig.40	第121号土壤出土瓦実測図(3)（1/4）	57
Fig.41	包含層および各遺構出土遺物実測図（1/4）	58
Fig.42	石鍋実測図（1/4）	62
Fig.43	石製品実測図(1)（1/3）	63

Fig.44 石製品実測図(2) (1 / 3)	64
Fig.45 土製品実測図 (1 / 3)	67
Fig.46 金属製品実測図 (1 / 2)	69
Fig.47 銅銭拓影 (1 / 2)	71
Fig.48 第123号住居址実測図 (1 / 40)	72
Fig.49 第123号住居址出土遺物実測図 (1 / 4 • 1 / 3)	73
Fig.50 第260号住居址実測図 (1 / 40)	74
Fig.51 第260号住居址出土遺物実測図 (1 / 4 • 1 / 3)	75
Fig.52 第138号土壤実測図 (1 / 40)	76
Fig.53 第138号土壤出土遺物実測図 (1 / 4)	76
Fig.54 包含層および各遺構出土遺物実測図 (1 / 4 • 1 / 3)	77
Fig.55 戰国期博多推定概要図	80

写真目次

写真1 I面検出遺構全景（東から）	5
写真2 II・III面検出遺構全景（東から）	6
写真3 IV面検出遺構全景（東から）	8
写真4 II・III面検出遺構全景（北から）	8
写真5 第3・4号埋甕遺構（北から）	9
写真6 第12号埋甕遺構（東から）	9
写真7 第19号集石遺構（北から）	11
写真8 第10号埋甕遺構（西から）	11
写真9 第13号石組遺構（北から）	11
写真10 第23号溝（北から）	13
写真11 第23号溝土層断面（北から）	13
写真12 第108号井戸（南から）	15
写真13 第108号井戸・23号溝出土磁器	15
写真14 第66号井戸（東から）	16
写真15 第107号井戸（東から）	17
写真16 第137号井戸（東から）	18
写真17 第139号井戸（東から）	19
写真18 第180号井戸（東から）	19
写真19 第107号井戸出土白磁碗	20

写真20 第137・139号井戸出土磁器	20
写真21 第11号遺構（西から）	22
写真22 第30号遺構（東から）	22
写真23 第40号遺構（西から）	22
写真24 第67号遺構（西から）	22
写真25 第37号土壤（西から）	26
写真26 第31号土壤（西から）	26
写真27 第32号土壤（西から）	26
写真28 第33号土壤下部（東から）	26
写真29 第34号土壤（東から）	26
写真30 第93号土壤（西から）	26
写真31 第38号土壤（東から）	26
写真32 第109号土壤（東から）	26
写真33 第33号土壤出土磁器	30
写真34 第33号土壤出土捏鉢	30
写真35 第33号土壤出土土鍋	30
写真36 第33号土壤出土擂鉢	30
写真37 第93号土壤出土磁器	30
写真38 第31・250号土壤出土磁器	30
写真39 第28号土壤（西から）	32
写真40 第35号土壤（北から）	32
写真41 第90号土壤（東から）	32
写真42 第104号土壤（南から）	32
写真43 第24号土壤出土土器	35
写真44 第125号土壤出土陶磁器	35
写真45 第35号土壤出土磁器	35
写真46 第90号土壤出土黄褐釉盤	35
写真47 第104号土壤出土青磁皿	35
写真48 第96・97号遺構（東から）	36
写真49 第29・36号遺構（西から）	36
写真50 第29号遺構（西から）	36
写真51 第94・95号遺構（東から）	36
写真52 第29号遺構出土磁器	39

写真53 第36号遺構他出土青磁	39
写真54 第82号遺構出土磁器	39
写真55 第94・95・96号遺構出土陶磁器	39
写真56 第26号遺構（東から）	40
写真57 第81号掘立柱跡（東から）	40
写真58 第290号溝（掘開前・西から）	41
写真59 第300号溝（東から）	41
写真60 第290号溝出土磁器	45
写真61 第300号溝出土磁器碗	45
写真62 第300号溝出土磁器皿	45
写真63 第300号溝出土瓦・磚	45
写真64 第300号溝出土陶器	45
写真65 第120号土壙（東から）	47
写真66 第64号井戸（東から）	47
写真67 第291号井戸（東から）	47
写真68 第64号井戸出土高麗青磁鉢	49
写真69 第119号土壙出土青磁碗	49
写真70 第120号土壙出土磁器	49
写真71 第120号土壙出土白磁碗	49
写真72 第138号土壙（東から）	51
写真73 第250・251号土壙（東から）	51
写真74 第280号土壙（西から）	51
写真75 第121号土壙（西から）	51
写真76 第138号土壙出土遺物	53
写真77 第165号土壙出土白磁	53
写真78 第252号土壙出土土器	54
写真79 第280号土壙出土白磁壺	54
写真80 第282号土壙出土土器	54
写真81 第283号土壙出土土器	54
写真82 第121号土壙出土瓦	56
写真83 包含層および各遺構出土遺物	59
写真84 墓石土器	60
写真85 墓石	65

写真86 線杖玉	65
写真87 石鋸	65
写真88 砥石	65
写真89 磨製石器	65
写真90 砕石	65
写真91 滑石製品	65
写真92 破	65
写真93 土製品	67
写真94 鉄製品	68
写真95 銅製飾金具	68
写真96 銅製品	68
写真97 第123号住居址遺物出土状況（南から）	72
写真98 第123号住居址（南から）	72
写真99 第260号住居址（南から）	74
写真100 第260号住居址（東から）	74
写真101 弥生時代の石器	77
写真102 第260号住居址出土礫石器	77
写真103 第123・260号住居址・第138号土塙出土遺物	78

表 目 次

表1 銅錢別出土数一覧	70
表2 遺構別出土錢一覧	70 - 71

第一章 はじめに

1. 調査に至る経緯

さる1987年9月3日、株式会社高木不動産は、福岡市博多区御供所町40・41番において、マンションの建設予定のため、教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、当該地の埋蔵文化財の有無の照会を行った。この結果、該地は、博多遺跡群（福岡市埋蔵文化財分布地図 天神49）に入り、隣接地でも数回の調査が実施されていることから、埋蔵文化財課では、建設にあたって事前の発掘調査が必要な旨を答申した。1987年12月14日、試掘調査を実施したところ地表下60cmのところで中世後期の遺構を検出し、280cmまで中世、それ以下は弥生時代の遺構が存在することが確かめられた。これを見て、両者協議のうえ1989年5月から同年8月までの約3カ月間、発掘調査を行う運びとなった。

調査は同年5月16日から同年8月1日までの67日間実施され、多大な成果を収めて、無事終了した。

2. 発掘調査の組織と構成

〈調査体制〉

調査委託 株式会社高木不動産

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任）

調査統括 文化部埋蔵文化財課 課長 柳田純孝（前任）

第一係長 柳沢一男（前任）

調査担当 第一係 小畠弘己（前任）

事務担当 第一係 松延好文（前任）

調査作業 青木佐智子、内山和子、内海武則、浦部栄子、川上洋一、川鍋洋子、木島みどり、木下信子、高浜栄一、田中ひろみ、仲上文子、中村啓太郎、中道秀雄、仁田坂聰、浜地富男、原憲一、深川昌弥、福澤山次郎、船越恒人、松尾ミキ、三浦力、宮本和正、森田タカ子、山岡明子、勝坂レイコ

整理作業 今井民代、今任奏子、今村淳子、上塘貴代子、河野明美、佐野八州枝、白井和子、多田律子、外村陽子、中村元子、原千帆、松尾詩穂子、吉田雅子

なお、調査期間中には、発掘調査に関する種々の条件整備や便宜について、株式会社高木工務店にお世話をいただきました。深く御礼を申し上げます。

第二章 遺跡の歴史的環境と調査区の位置

博多遺跡群は北を博多湾に接し、東西を石堂川と博多川に挟まれた東西0.8km、南北1.5kmの約120haの広大な範囲におよぶ。現在県庁前から市役所へ通ずる通称「明治通」を境として、北が息浜、南が博多浜と呼ばれる砂丘上に位置している。古くは元禄年間に聖福寺境内より金器などの入った壺が発見されるなど、古来より中国陶磁器の頻繁に出土することは、つとに知られていた。この博多遺跡群に本格的な考古学のメスが入るのは、1977年、市営地下鉄のT工事に先立って行われた店屋町における発掘調査であった。これ以来、道路建設や民間のビル建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、その回数は今日まで80余回にも及んでいる。

この博多遺跡群で最も古い遺構は、第30次や今回の調査で発見された弥生時代中期中頃の住居址で、博多浜の中央部や東よりの地形的に高い地点で発見されている。またこの時期の墓は甕棺を中心として博多浜の南部に展開している。この主体をなすものは東長寺境内から南に延びる甕棺墓群で、谷に沿うように二列に配置する。後期後半の住居址や土塙は博多浜南端の第17次調査で確認されており、ここでは碧玉の玉造りの跡が発見されている。弥生時代終末から古墳時代前期にかけての遺構は、これも博多浜の南部を中心として数多く発見されている。遺構の種類は住居址や方形周溝墓などで、住居は20基、墓は4基ほどが確認されている。方形周溝墓の主体部は第17・36・62次調査で確認されており、割竹形木棺で鉄劍などが副葬されていた。古墳時代中期になると祇園町交差点の東に全長65mあまりの前方後円墳が築かれている（第28・30次調査）。これは、後世の擾乱によってかなり破壊を受けてはいたが、蓋石や円筒埴輪・家形埴輪などが検出されており、5世紀前半頃の首長墓と考えられている。

古代の博多には太宰府の出先機関である「鷹臘中島館」があった可能性が指摘されているが、いまだ決定的な証拠は発見されていない。しかし、古代の役所の存在を想定させる墨書き土器、石帶、陶磁器などの遺物や方一町の溝で囲まれた空間や井戸などが発見されており、何らかの公的施設が存在したと考えられる。古代末から「大唐町」や「宋人百堂」などの呼び名に表されるように、博多大陸との貿易港として発展を遂げる。12～16世紀にかけては多量の輸入陶磁器や生活用具が井戸や土塙、建物群とともに発見されている。

今回の調査地点は博多浜の第II砂丘の東端部にあたり、現標高は5～5.5mと、この砂丘上の東側の高まりでは一番高い地点にあたる。地形的には、東へ緩く傾斜している。中世後期には、聖福寺と承天寺の境付近にあたり、現在は東長寺の裏手、妙楽寺の門前にあたる。北西の隣接地では第1・8・30次調査が実施されており、第30次調査では弥生時代中期の住居址などが確認されている。第1・8次調査の正式報告は未だ発表されてないが、中世中頃の町割を示す溝や道路が発見されている。



Fig. 1 既往の調査と第48次調査区の位置図 (1/9000)

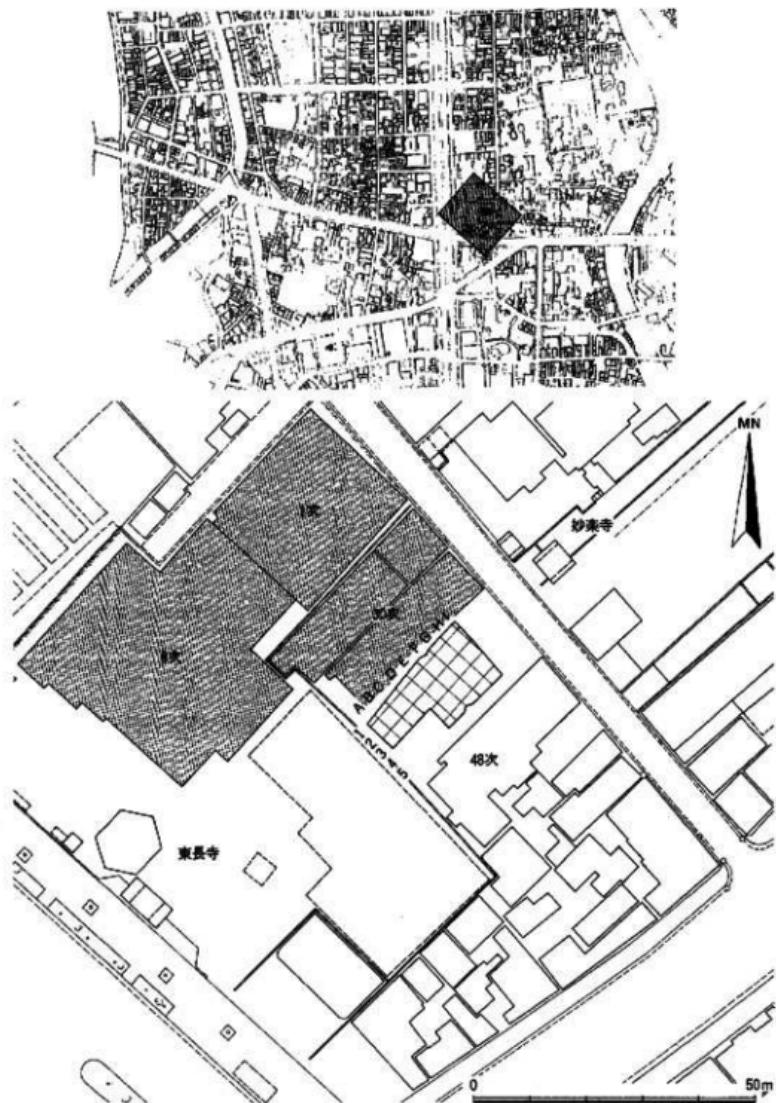


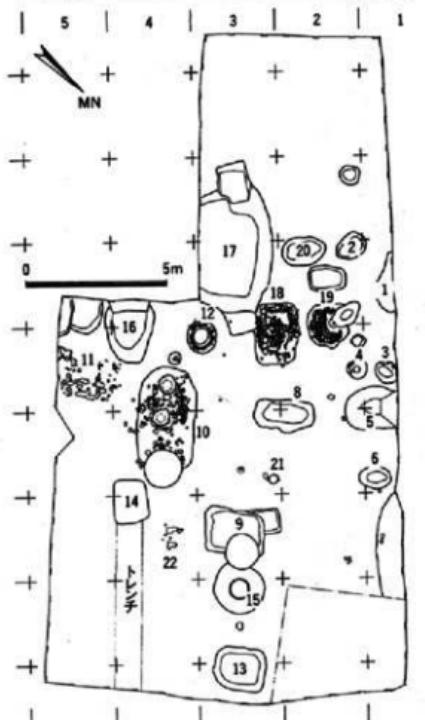
Fig. 2 調査区と周辺測量およびグリッド配置図 (1/1000)

第三章 調査の成果

1. 各遺構面の概要



写真1
I面検出遺構
全景
(東から)

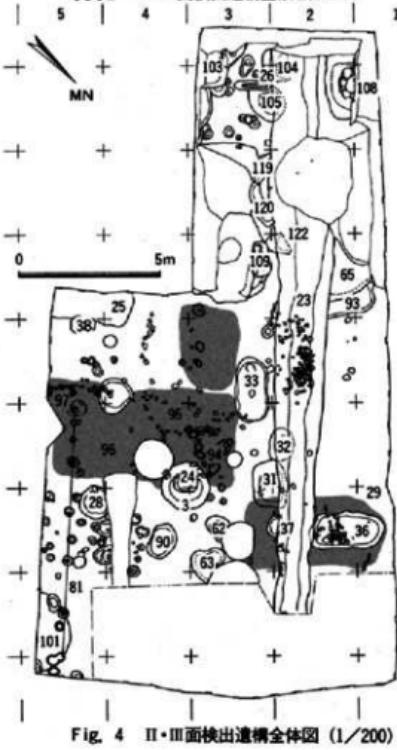


試掘調査の結果により、表土下130cmは機械力によって掘削した。都合3回掘り下げを実施した。II面から次の面に至る間に粘土を貼った土間遺構を検出したのでII面から30cmほど下の面をIII面とした。このため、I面～IV面までの4面の遺構検出面がある。

- A I面（標高4.7～4.5m）
- + 地表下1.3～1.5mで確認した遺構検出面である。検出した遺構はほとんど近世から近代に至る時期のもので、中には現代の井戸まであった。
- C おもな遺構は、第3・4・10・12・21号埋廻遺構や第18石組遺構、第19号集石などがある。この他に第1・2・5・6・7・8・9・13・16・17・20号土壙などがある。また、E-5区には13世紀後半から14世紀初頭の時期の土師皿を廃棄した遺構（第11号）があった。
- F 埋廻遺構や石組遺構などは、便所と考えられ、調査区の中程に集中している。これらは時期的には17世紀後半から18世紀代のものであるが、道の裏手にあたり、屋敷の境がこの付近であることを示している。また、廻の底部は10cmほどしか残っていないことから、生活面は80cmから1mほど上部にあつたものと考えられる。



写真2 II・III面検出遺構全景(東から)



II面・III面（標高4,0~3,7m）

1面から70cmほど掘り下げた面である。調査区の長軸に沿う北東—南西方向の溝（第23号）を確認した。また溝に切られた石組みの井戸（第108号）や桶組の井戸（第181号）がならんで、調査区の南端で検出された。これらの遺構はほぼ16世紀から17世紀前半の時期にあたり、これも掘り方の深いもので、この時期の生活面は近世と同じく、50cmから1mほど上部にあったものと考えられる。

- 十 この時点で、第23号溝東側のA・C-
B 3区のテラス部分はすでに、茶褐色～黃
褐色の地山に近いレベルまで達してお
十 り、地形が南から北へ傾斜しているこ
C とが窺われた。

十一 この面には、調査区の北半分を中心
D として焼土層が拡がっていた。その厚
十 さも厚いもので5cmと極めて薄く、断
E 片的な状態であった。また、焼土を含
む土で埋められた第24・35号などもある
十 る。13世紀後半から14世紀初頭の土師
F 盆を多数廃棄した土壌が、かなりの数
十 検出されているが、この中で最も多量
の遺物を出土した第33号土師皿廃棄壙
G は、この焼土層を切っていた。

十一 また、この面では白灰色の粘土の拡
H がりが認められ、これを掘り下げると
十 ほぼ長方形のプランをもつことが判明
I した(第29・94・95・96・97号遺構)。この
I 土師皿廃棄壙を掘り上げ、粘土を貼った
遺構の掘り方を検出するために、II

面から30cmほど下げた時点でⅢ面とした。おそらく土間などの貼り床と考えられる。この床にも焼土や炭混じりの灰屑が貼り込まれていることから、焼土層は一枚のものではなく、数回の火事によるものと考えられる。この土間遺構と土師皿廐棄場は切り合いがあり、数回の作り替えも認められる。

この13世紀から14世紀にかけての遺構で土師皿廐棄場の次に多かったのが、井戸で、第137・139・180号などがある。すべて素掘りの木桶枠で、調査区の南半分に集中していた。その切り合いも激しく、数度の作り替えがあった模様である。

偏平な礎をもつ獨立柱建物の柱穴もこの面で多数検出したが、5間の南北方向の柱穴列（第81号獨立柱建物）を検出できただけであった。この他、特殊なものとしては、鉄滓の流れ込んだ上塙が1基ある（第26号上塙）。

この焼土を前後する面は、この時期の生活レベルとしてさしつかえないものと考えられる。

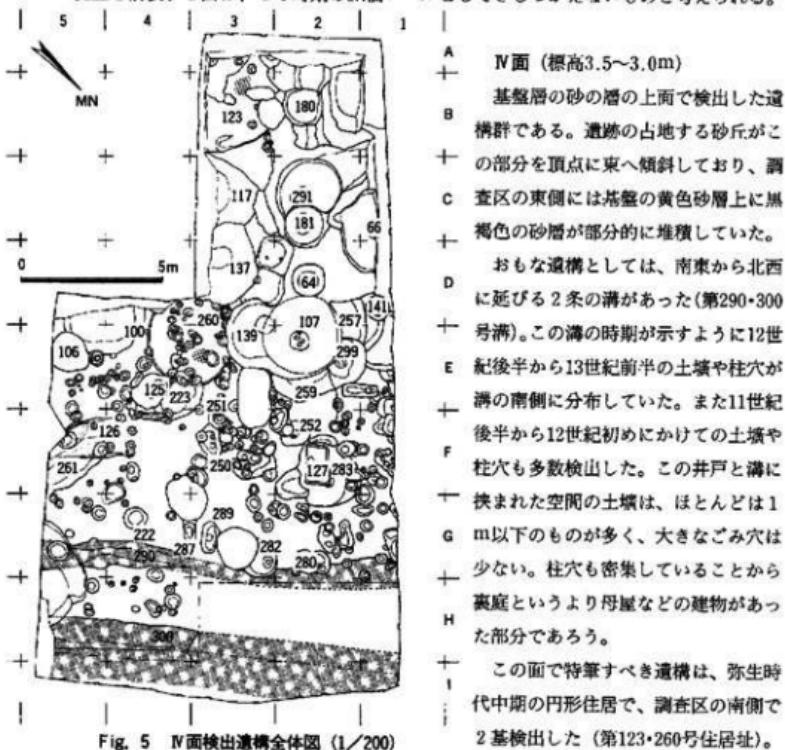




写真3 IV面検出遺構全景(東から)



写真4 II・III面検出遺構全景(北から)

2. 近世以降の遺構と遺物

すべて1面で検出した遺構で、井戸や埋甕遺構、石組遺構など構造物の一部が検出されているにすぎない。これらは、いずれも当時の生活面の地下に設営もしくは掘り込まれたもので、この検出レベルが当時の生活面を表したものではない。

第3・4号埋甕遺構 (Fig. 6、写真5)

E-1・2区に位置し、素焼きの瓦質の甕を埋設した土壌である。甕は底部付近の胴の破片が残るのみで、おそらく1面検出の際に破壊されたのであろう。甕はいずれも、内面に刷毛目をとどめる厚さ1.5cmほどのものである。

第12号埋甕遺構 (Fig. 6、写真6)

E-3区にあり、甕でなく円形の土壌の底に礫や瓦片などを敷き、そこに漆喰に似た粘土を塗ったものである。

第10号埋甕遺構 (Fig. 6、写真8)

E・F-4区に位置する。長さ3.6mほどの長梢円の土壌に2基の甕を据えたものである。東端は現代の井戸に切られている。甕に下には礫を敷きつめ、甕の周囲にも安定を図るために拳大くらいの礫が配置されている。甕は底径を40～50cm測る素焼きの瓦質の甕で、これも調整用の刷毛目を内面にとどめていた。

このほかに、F-2・3区で同様の甕の底部のみが検出された(第21号)が、掘り方は不明であった。これらの施設の用途としては、染め物工房や油の貯蔵の施設などとして埋甕が使用されていることが知られているが、その配置や数の少なさなどから、おそらく便所と考えられる。

第18号石組遺構 (Fig. 7、写真9)

D・E-2・3区にある長辺1.8m、短辺1.2mの石室で、三面に礫を積み上げ区画したものである。内側には東側から崩れたように石が流れ込んでいた。北の辺は木板で壁が作られた可能性もあるが、西辺の北側もないことから、この部分は破壊されたと考えられる。残りの良い南辺で、三段の石が残っていた。



写真5 第3・4号埋甕遺構(北から)

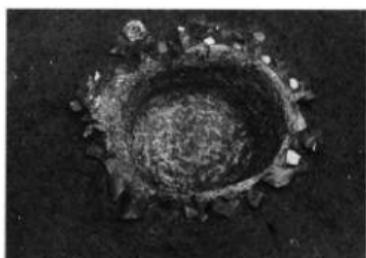


写真6 第12号埋甕遺構(東から)

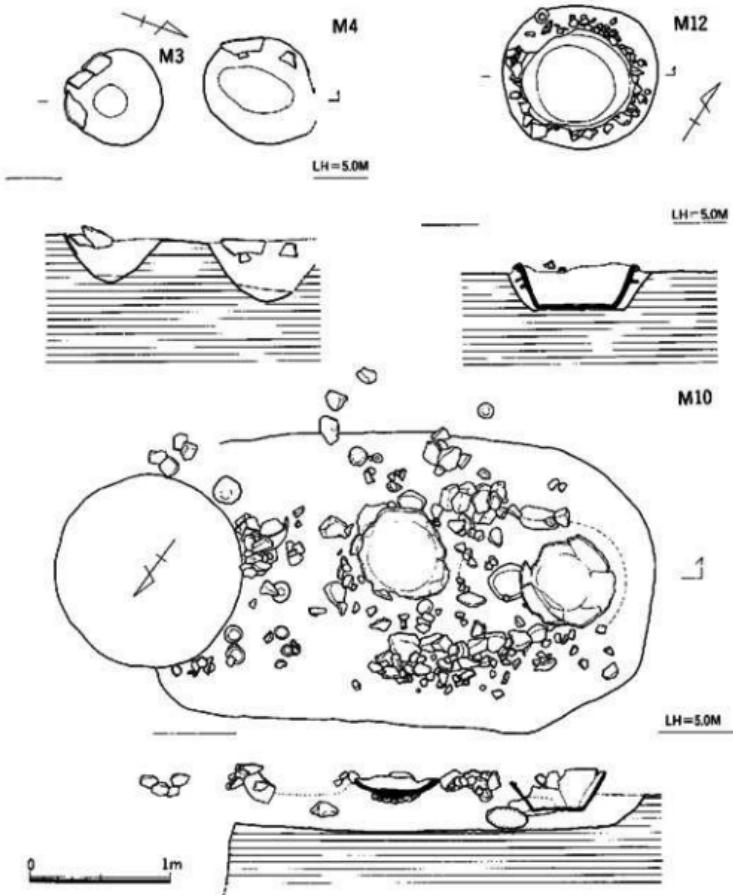
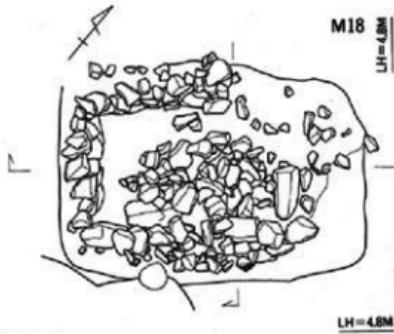


Fig. 6 第3・4・10・12号埋壙遺構実測図 (1/40)

第19号集石 (Fig. 7、写真 7)

18号石組遺構に隣接してD・E-2区で検出した。半円形状に拳大の礫が配置されており、断面をみると2ないし3段ほど敷き詰められている。中央は破壊された可能性が高い。本来の形状は隅丸の方形か長方形で、第18号石組遺構とともに水係りの遺構であったと考えられる。

この他、近世の遺構と考えられるものは、第1・2・5～9・13・14・16・17号などのごみの廻棄穴が



M18
LH=4.8M



M19

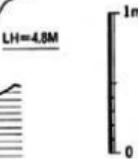


Fig. 7 第18号石組造構・19号集石実測図
(1/40)



写真7 第19号集石造構(北から)

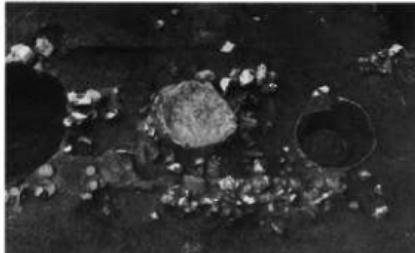


写真8 第10号埋甕造構(西から)



写真9 第13号石組造構(北から)

あり、多量の近世陶磁器を出土した。

出土遺物 (Fig. 8.1~9)

1~4は、第9号土壙から出土したものである。1は伊万里系の磁器皿で、高台は蛇の目搔き取りで、内面には鳥花と山水文を描く。外面には七宝文を配する。2は把手付の蓋である。蓋上面に楓の葉をあしらっている。3は浅いやや大振りの皿である。内面に七宝文を描く。底部にはハリの痕がある。4は肥前系の陶器の大皿である。波状に刷毛目を施す三島手の陶器で、



Fig. 8 近世陶磁器実測図 (1/4)

見込には砂目が残る。5～8は第5号土壌、9は19号土壌より出土した肥前系の陶磁器である。5は蛇の目焼き取りの高台をもつ磁器皿で、わずかに焼き歪みを生じている。内面に花や菱をあしらった文様区画の内部に松竹梅を配する。6・7は京焼き風の陶器碗で、7には鉄絵の草文がある。8は内面に山水文を描いた菊皿で、口唇に鉄朱を塗っている。9も菊皿で、内面に鶴を描く。

これらは、18世紀の後半の時期に相当する。これは、この調査区で確認したほとんどの近世以降の時期にあたる。

3. 中世・古代末の遺構と遺物

ここで取り扱う遺構と遺物は、17世紀初頭から11世紀末にかけてのもので、大きく4つの時期に分けることができる。中世Ⅰ期（16世紀後半から17世紀初頭）…明の染付に代表される。中世Ⅱ期（13世紀後半から14世紀初頭）…龍泉Ⅲ類の青磁および口禿の白磁に代表される。中世Ⅲ期（12世紀後半から13世紀前半）…龍泉Ⅰ類の青磁に代表される。中世Ⅳ期（11世紀末から12世紀初頭、古代末）…白磁に代表される。以下、この区分に従って主な遺構とその出土遺物について述べたい。

（1）中世Ⅰ期

第23号溝 (Fig. 9、写真10・11)

調査区の北から南へ延びる溝で、正確な方位はN-45°-Eである。溝の幅と深さは、それぞれ北部で0.6mと0.2m、南部の端で3mと1.2mである。幅が極端に異なるのは、溝の深さが、南北にかけて深くなることに起因しており、絶対標高でも北と南では1mほどの差がある。意図的に

北から南へ流れる堀としての機能をもたせたものであろうか。E-2区には数多くの拳大の礫が投げ込まれている。礫のある部分までの土層の堆積状況は、上から茶褐色土層（厚さ30cm）、暗茶褐色土層（厚さ15cm）、粗砂混じりの黒褐色土層（厚さ35cm）の順で、以下はFig. 9のとおりである。溝の断面形は南部でV字形、北側でゆるいU字形を呈する。

出土した遺物は、明の染付の碗、皿 (Fig. 11.10~15、写真13.51~58)を中心としたもので、土師皿・坏

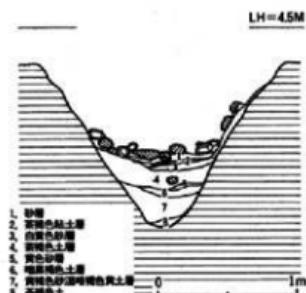


Fig. 9 第23号溝土層断面実測図 (1/40)



写真10 第23号溝(北から)



写真11 第23号溝土層断面(北から)

(20~50)、李朝の粉青沙器の瓶 (Fig.11.18+19) などがある。10・12・51・56は小野分類のC群碗、11・13・14・52・54はE群碗である。53・55はC群皿である。15・57はソフトータイプの皿である。

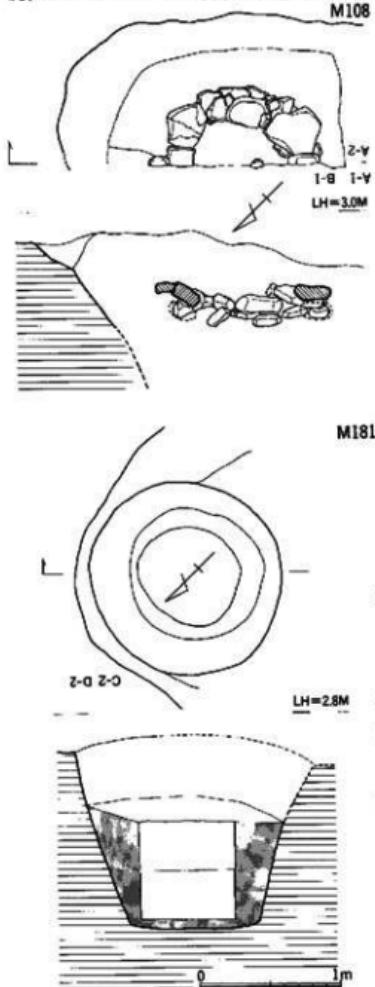


Fig. 10 第108・181号井戸実測図 (1/40)

華南系の青花としては58があり、軟質の黄白色の胎土をもち、見込みの釉を輪状に搔き取るのが特徴である。16・17は青磁皿で、外底に「久口」の墨書がある。

第108号井戸 (Fig.10、写真12)

A・B-2区にある石組の井戸で、半分は調査区外へ消える。壁の崩落の危険もあって完掘していないので、詳細な構造やその時期については不明である。出土遺物には、青磁片 (Fig.11.61) や華南系青花の碗 (62) があり、16世紀代後半におさまるものと考えられる。第23号溝との関係は、溝に切られており、時期的に古いものである。

第181号井戸 (Fig.10)

C-2区にある井戸である。井戸枠は桶製で、残りの悪い桶が2段観察された。出土遺物には細蓮弁文青磁碗などがある。

以上見てきたように、この16世紀から17世紀にかけての遺構は、この調査地点ではきわめて少なかった。しかし、検出された遺構は井戸や溝のように掘り方の深いものばかりである。近世の遺構がさほど上部に位置せず、ほぼ同一面で検出されることは、本来存在したこの時期の遺構が、近世にかなりの削平を受けたものと考えられる。これはこの周辺の博多浜の調査全般に認められる現象である。博多浜の南の遺跡の外縁（谷部）に近づくと遺構や遺物の量が増加することは、この傍証であろう。

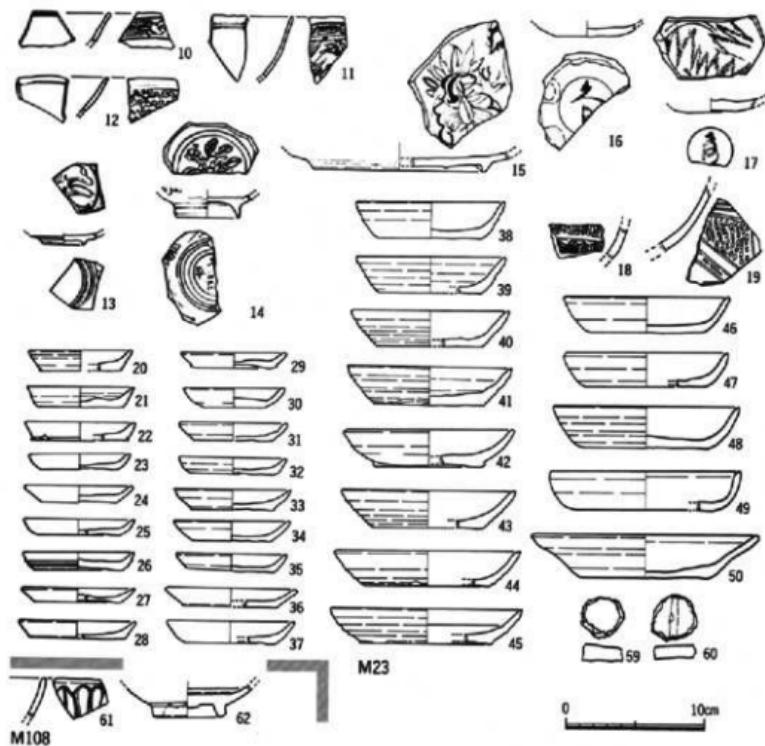


Fig. 11 第23号溝・108号井戸出土遺物実測図 (1/4)

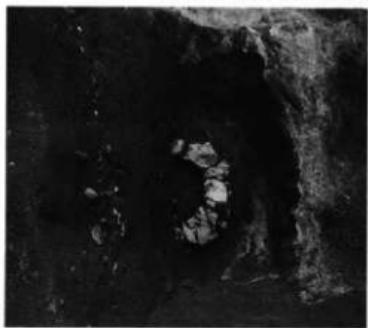


写真12 第108号井戸(南から)

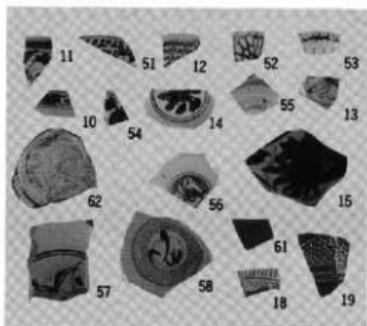


写真13 第108号井戸・23号溝出土磁器

(2) 中世II期

今回の調査で最も多くの遺構を検出した時期である。井戸 7 基、土塙24基、土間状の遺構5基、鍛冶遺構1基、掘立柱跡1基、土師皿廃棄遺構5基などがある。



写真14
第66号井戸
(東から)

第66号井戸 (Fig. 12、
写真14)

C・D-6区にある井戸で、半分は調査区外へ消える。掘り方の直径は3.2mで、井戸枠は桶であるが、残りが悪い。深さは1.8mである。

出土遺物は、掘り方から鎧蓮弁文青磁碗や口禿白磁皿の破片、井戸枠からは象嵌をもつ高麗青磁の破片が出土した。

第107号井戸 (Fig. 13、
写真15)

D・E-2・3区にある井戸で、掘り方の直径は3.4mで、深さ2.0mを測る。井戸枠は桶である。底から1mのところに拳大の角環が数個投げ捨ててあった。底付近からはほぼ完形に近い口禿の白磁碗 (Fig. 16.63) が出土した。この他、鎧蓮弁文青磁碗 (64.65) や陶器鉢 (68)、土師皿・坏 (66-67) が出土している。63-64-66が井戸枠内からの出土で、他は掘り方から

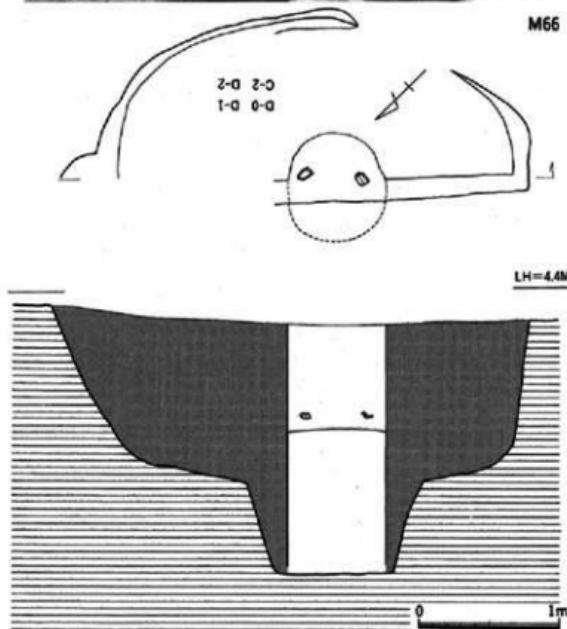


Fig. 12 第66号井戸実測図 (1/40)

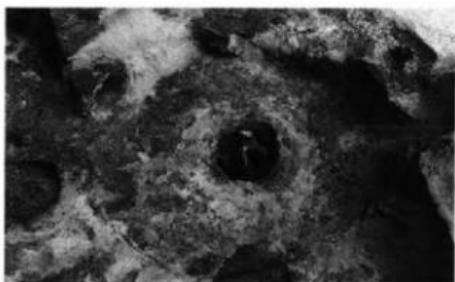


写真15
第107号井戸
(東から)

M107

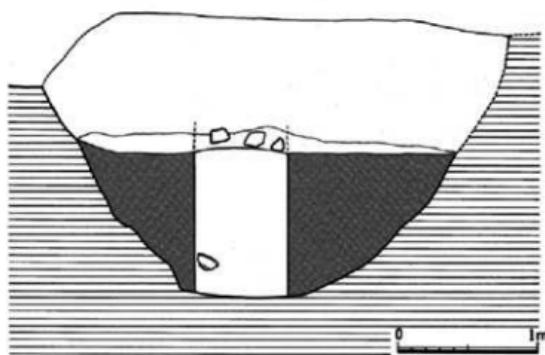
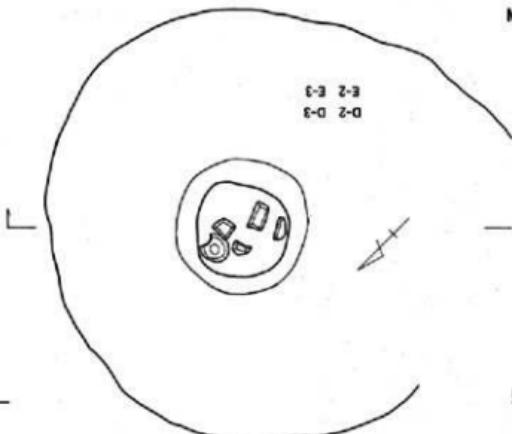


Fig. 13 第107号井戸実測図 (1/40)

出土している。

第137号井戸 (Fig.
14、写真16)

D-3区で検出した井戸で、約半分は調査区外へと続いている。直径3m、深さ1.8mを測る。井戸枠は桶であるが、残りは悪い。井戸枠からは口禿の浅い白磁皿 (Fig.16.70)、鍋蓮弁文青磁碗 (69)などがある。掘り方からは同安窯の青磁皿が出土した。71は外底に墨書きがあるが、「古」と花押であろうか。下の字が判読できない。

第139号井戸 (Fig.
15、写真17)

LH=4.0M D・E-3区で検出した井戸で、107号井戸に西半分を破壊されている。復元すると直径2.6m、深さ2.2mである。井戸枠は桶で、底から1.2mほどを確認しているが、残りが非常に悪い。掘り方からは、鍋蓮弁文青磁碗 (Fig.16.72) や口禿白磁皿 (73)などが出土している。



写真16
第137号井戸
(東から)

第180号井戸 (Fig. 15、写真18)

B-2区で検出した井戸である。掘り方の下部まで、第23号溝に削平されている。現存部で直径1.4m、深さ1.5mを測る。井戸枠は桶であるが、残りが悪い。出土遺物には輪転弁文青磁碗や口禿白磁皿、土師皿・壺などがある。

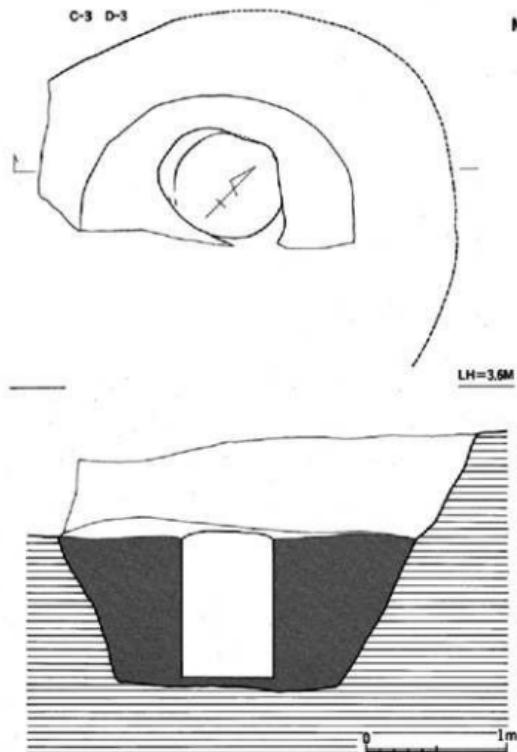


Fig. 14 第137号実測図 (1/40)

この他、この時期に属すると考えられる井戸としては、第64 (D-1区)・65 (D-1・2区)・101 (H-5区) 号井戸がある。

これらは、すべて調査区の南半分であるB～E区にかけて分布している。これは町家の裏手の庭先に井戸が掘られたようすを示している。



写真17 第139号井戸(東から)



写真18 第180号井戸(東から)

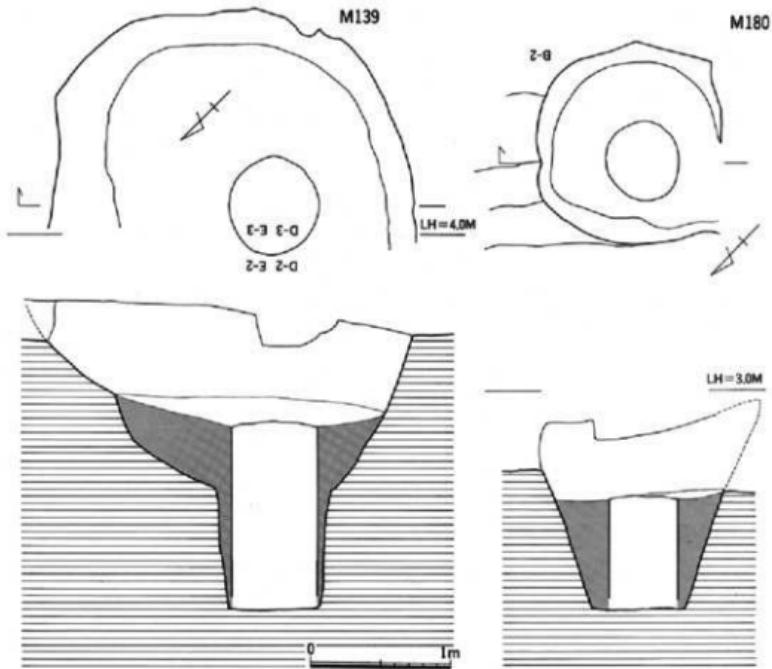


Fig. 15 第139・180号井戸実測図 (1/40)

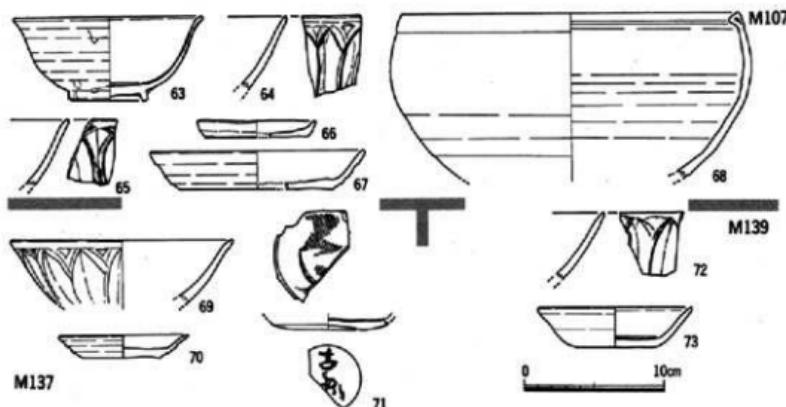


Fig. 16 第107・137・139号井戸出土遺物実測図 (1/4)



写真19 第107号井戸出土白磁碗

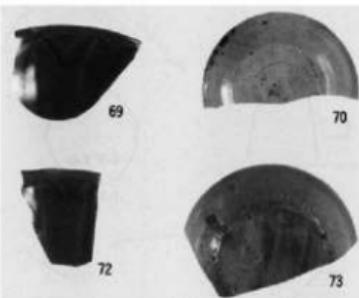


写真20 第137・139号井戸出土磁器

ここで紹介するのは、明確な掘り方などのプランを持たず土師皿・壺が廃棄された状態を検出したものである。

第11号遺構 (Fig. 17、写真21)

I面のE-5区で検出した。その一部は調査区外へ続くものと思われる。土師皿や壺が30枚以上あるものと思われる。碌や銅錢も一緒に廃棄してあった。銅錢は8枚出土した。開元通寶、政和通寶などがある。土師皿・壺の法量は皿が、8～9cm、平均8.5cmで、壺が12～16cm、21枚のうち12～13cmの間が10枚ある。土師器の他、鎌倉文青磁の小碗 (Fig. 18.74)、青磁皿 (75)、土鍋 (76) などがある。

第30号遺構 (Fig. 17、写真22)

I面のE-5区で検出した。土師皿・壺数枚と刀身などが集中して、廃棄してあった。

第40号遺構 (Fig. 17、写真23)

II面のE-F-1区で検出した。擂鉢片 (Fig. 18.113) 土師皿・壺4枚ほど (109~112) と刀が出土した。

第67号遺構 (Fig. 17、写真24)

II面のE-1区で検出した。土師皿・壺が30枚ほど出土した (Fig. 18.114~130)。その法量は皿 (14枚) が、7~9cm、平均7.9cmで、ピークは8cm、壺 (13枚) が11~14cm、平均12.7cmで、ピークは12.5~13cmである。

ここでは土師皿・壺を中心に廃棄した土壤(以下、土師皿廃棄壙と称する。)を紹介する。これは、本時期の数のうえで中心をなすもので、数基が並んで掘られている状態もあった。おそらく、裏庭などに宴会の後、残飯と一緒に使用した土師皿や壺を捨てた時の遺構と考えられる。

第31号土壤 (Fig. 19、写真25)

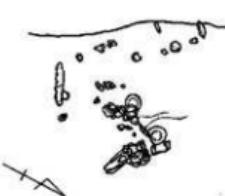
II面のE-3区で検出した土師皿廃棄壙である。32・33号土壤と東西方向に並んで検出した。長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。およそ180枚ほどの土師皿・壺 (Fig. 20.133~147) とともに、型押しの口禿の青白磁の皿 (131) や合子蓋 (132) が出土した。銅鏡は、五銖鏡、景符元寶、熙寧元寶など6枚が出土した。土師皿・壺の法量は皿 (83枚) が、6~10cm、平均8.1cmで、ピークは8~8.5cm、壺 (49枚) が11~16.5cm、平均12.2cmで、ピークは12cmである。

第32号土壤 (Fig. 19、写真27)

II面のE-3区で検出した橿円形の土師皿廃棄壙である。長さ1.3m、幅0.9m、深さ1.1mを測



M11



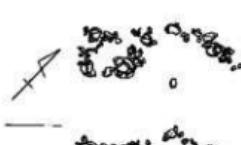
M30



M40



LH=4.0M



M67



0 1m

Fig. 17 第11・30・40・67号遺構
実測図 (1/40)

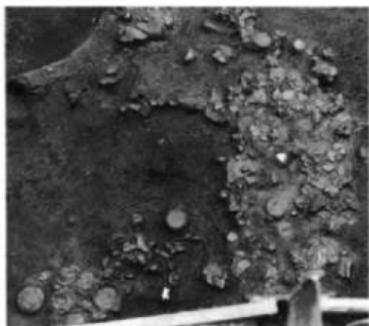


写真21 第111号遺構(西から)



写真22 第30号遺構(東から)



写真23 第40号遺構(西から)



写真24 第67号遺構(西から)

る。中からは多量の土師皿や壺が疊をまじえてレンズ状に幾重にも重なって出土した。なおFig. 19の遺構図の出土状況は底の付近は未実測である。土師皿・壺は実測可能なものを極力図示した。口径は皿（112枚）が6～9cm、平均8.1cmで、ピークは7.5～8.5cm、壺（112枚）が11～14cm、平均12.4cmで、ピークは12～13cmである。この他、青銅製の飾り金具（Fig. 46.815）が出土した。銅銭は、五銖銭、開元通寶、政和通寶など10枚出土した。

第33号土壙 (Fig. 19、写真28)

II面のE・F-3区で検出した長さ2.6m、幅1.2m、深さ1.0mの長楕円形の土師皿廃棄壙である。土師皿を廃棄した土壙の中では最も大きく、かつ多量に遺物を出土したものである。内部には偏平な大きな疊や角疊が多数混じっていた。土師皿・壺は計測可能なものだけでも338点におよぶ。土師法量は皿（184枚）が、6～10cm、平均8.1cmで、ピークは7～9cm、壺（154枚）11～15.5cm、平均12.4cmで、ピークは12～13cmである。土師皿や壺（Fig. 21.240～311）の他に

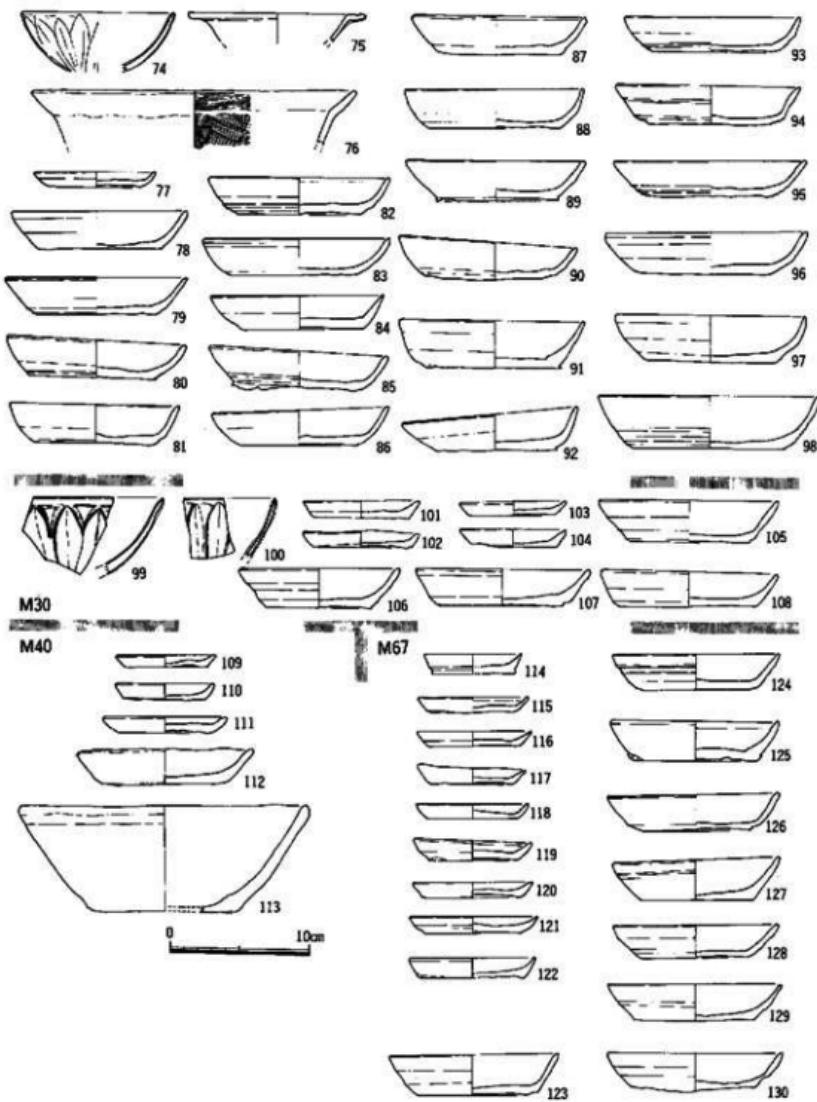


Fig. 18 第11・30・40・67号邊構出土遺物実測図 (1/4)

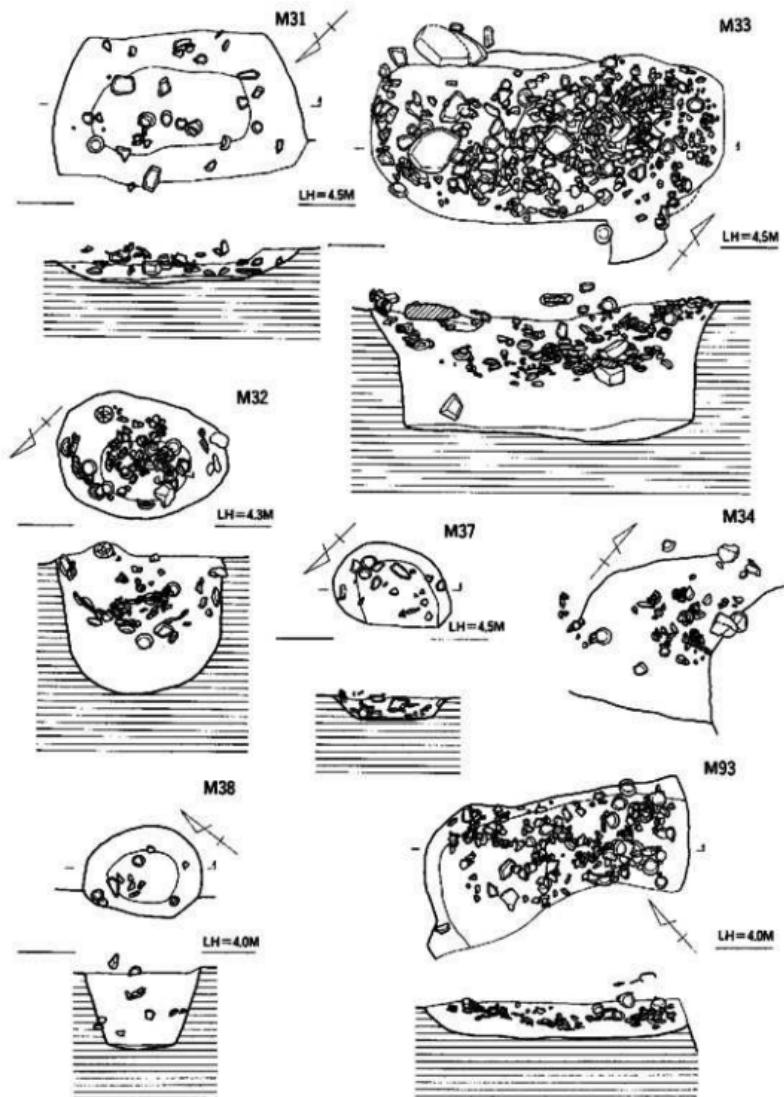


Fig. 19 第31・32・33・34・37・38・93号土壤実測図 (1/40)

ほぼ完形に近い土鍋（237）や捏鉢（238）、擂鉢（写真36.239）などがある。また破片で見込みにスタンプ文をもつ鎬蓮弁文青磁碗（235）や白磁水注（236）がある。土師皿や壺のみでなく、調理具である鍋や捏鉢や擂鉢も一緒に廃棄してあるのは興味深い。銅錢は30枚と多量に出土しており、開元通寶、景祐通寶、皇宋通寶、聖宋元寶、至和元寶、元祐通寶、淳化元寶、乾元重寶などがある。

第34号土壤 (Fig.19、写真29)

II面のF-4区で確認した土壤である。東半分を現代の井戸に破壊されている。現存部分で長さ1.0m、幅1.2m、深さ0.2mである。口禿の白磁皿 (Fig.22.312) や約50枚ほどの土師皿・壺 (313～342) が出土した。法量は皿(16枚)が、6～8.5cm、平均7.8cmで、ピークは8cm、壺(13枚)が12～13cm、平均12.5cmで、ピークは12～12.5cmである。銅錢は皇宋通寶の一枚である。

第37号土壤 (Fig.19、写真25)

II面のG-2・3区で検出した小型の土師皿廃棄壙である。半分を第23号溝に破壊されている。現存部で長さ0.6m、幅0.75m、深さ0.2mである。土師皿・壺 (Fig.22.344～347) は約10枚ほど出土した。この他鎬蓮弁文青磁碗（343）などがある。銅錢は嘉祐通寶が一枚出土した。

第38号土壤 (Fig.19、写真31)

II面のE-5区で検出した横円形の土師皿廃棄壙である。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.6mである。口禿の白磁皿 (Fig.22.348) と土師皿・壺 (349～353) が約10枚ほど出土した。

第93号土壤 (Fig.19、写真32)

III面のD-1・2区で検出した長横円形の土師皿廃棄壙である。南側を第65号遺構、東側を第23号溝に切られる。現存部分で長さ1.9m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。土師皿・壺 (Fig.22.363～382) は約80枚出土している。土師皿・壺の法量は皿(25枚)が、6～10cm、平均7.8cmで、ピークは7～8cm、壺(46枚)が11～14cm、平均12.0cmで、ピークは12cmである。この他鎬蓮弁文青磁碗（354～361）や口禿の白磁皿（362）が出土している。361は見込み蓮花のスタンプ文がある。銅錢は8枚出土し、皇宋通寶、治平元寶などがある。

第109号土壤 (写真32)

III面のD-3区にある長さ1.9m、幅0.8m、深さ0.75mの長横円形の土師皿廃棄壙である。底に白色の粘土が堆積していた。土師皿・壺は59枚がある。法量は皿(22枚)が、6.8～10cm、平均8.0cmで、ピークは8cm、壺(37枚)が11～13.4cm、平均12.3cmで、ピークは12～13cmである。この他須恵質の擂鉢片がある。開元通寶が2枚出土した。

第122号土壤

III面のD-2・3区にあり、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。鎬蓮弁文青磁碗や口禿白磁皿、黄褐釉盤、瓦などとともに、約50枚ほどの土師皿や壺が出土した。その法量は皿(17枚)が、7～10cm、平均7.9cmで、ピークは8cm、壺(30枚)が11～14cm、平均12.1cmで、ピークは



写真25 第37号土壤(西から)



写真26 第31号土壤(西から)



写真27 第32号土壤(西から)



写真28 第33号土壤下部(東から)



写真29 第34号土壤(東から)

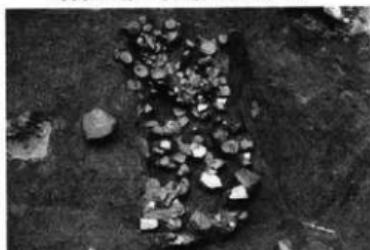


写真30 第93号土壤(西から)



写真31 第38号土壤(東から)



写真32 第109号土壤(東から)

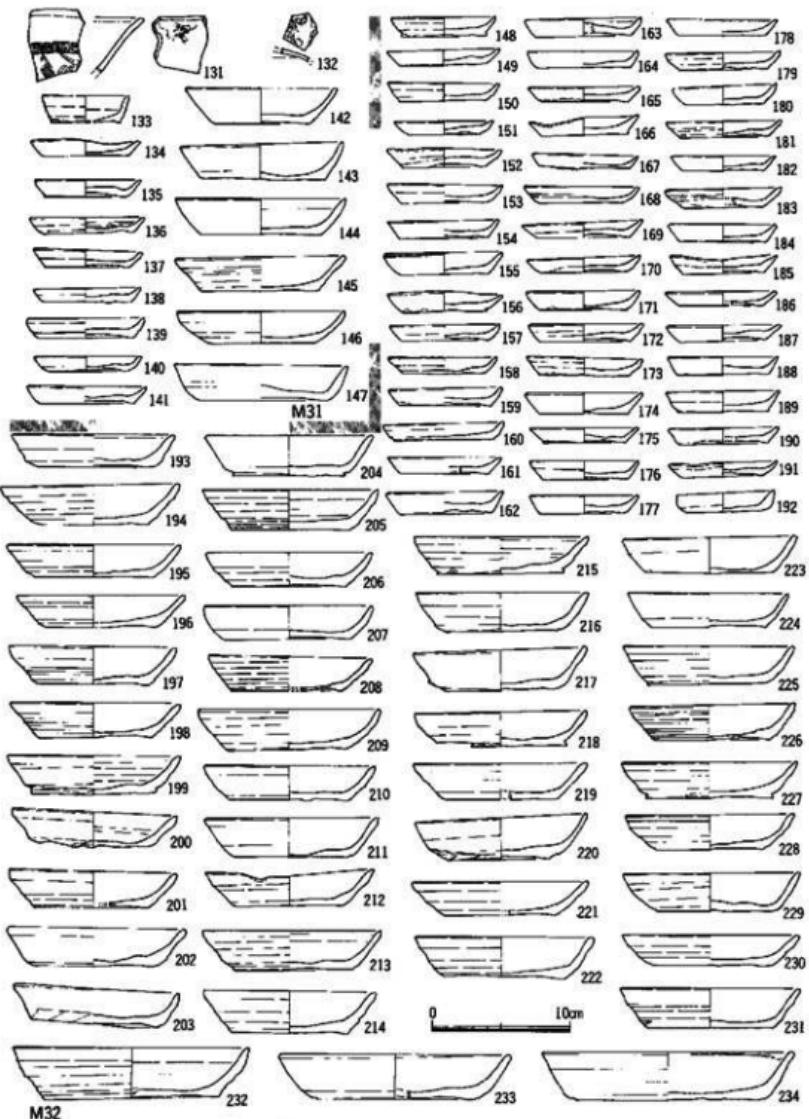


Fig. 20 第31・32号土壤出土遺物実測図 (1/4)

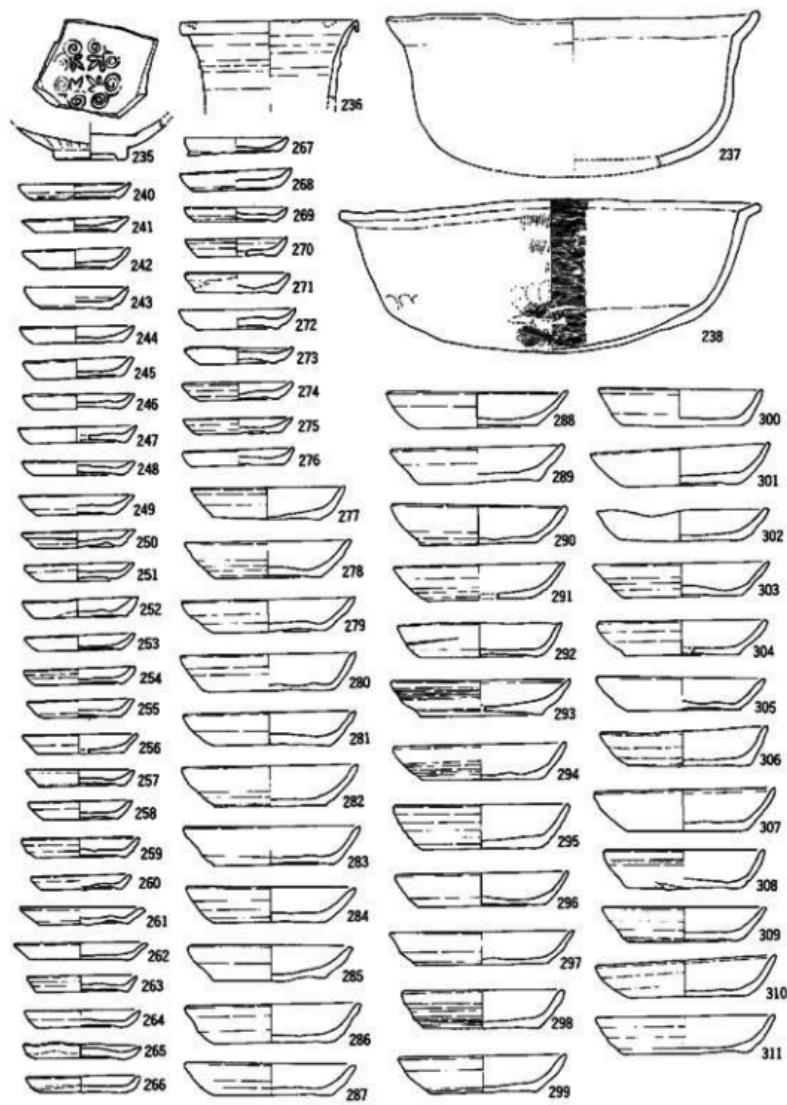


Fig. 21 第33号土壤出土遺物実測図 (1/4)

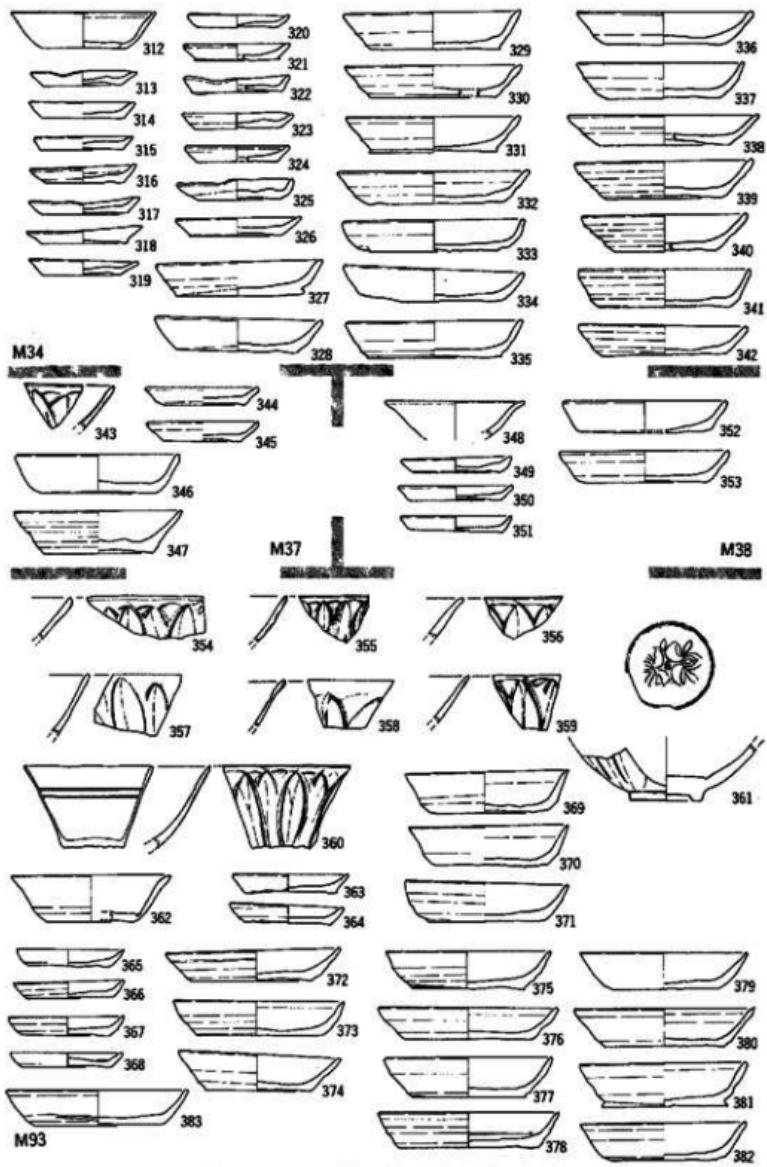


Fig. 22 第34·37·38·93号土壤出土遺物実測図 (1/4)

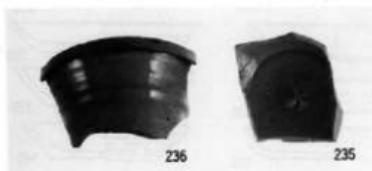


写真33 第33号土壤出土磁器



写真34 第33号土壤出土埋鉢



写真35 第33号土壤出土土鍋



写真36 第33号土壤出土擂鉢

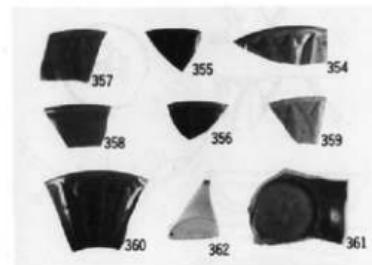


写真37 第93号土壤出土磁器

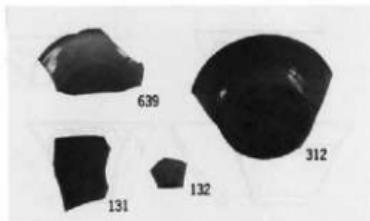


写真38 第31・250号土壤出土磁器

12cmである。

次に一般的な土壤について述べる。

第24号土壤

II面のF・G-3・4区にある円形土壤である。長さ0.8m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。第35号土壤の埋土の可能性もある。この中からFig. 24.386の瓦質の火鉢片が出土した。386は外面に菊花のスタンプ文が押してある。384は築蓮弁文青磁碗である。385は青磁の口折れの皿である。この他、土師皿や壺(387~393)が出土している。銅錢は4枚出土しており、皇宋通寶、咸平元寶などがある。

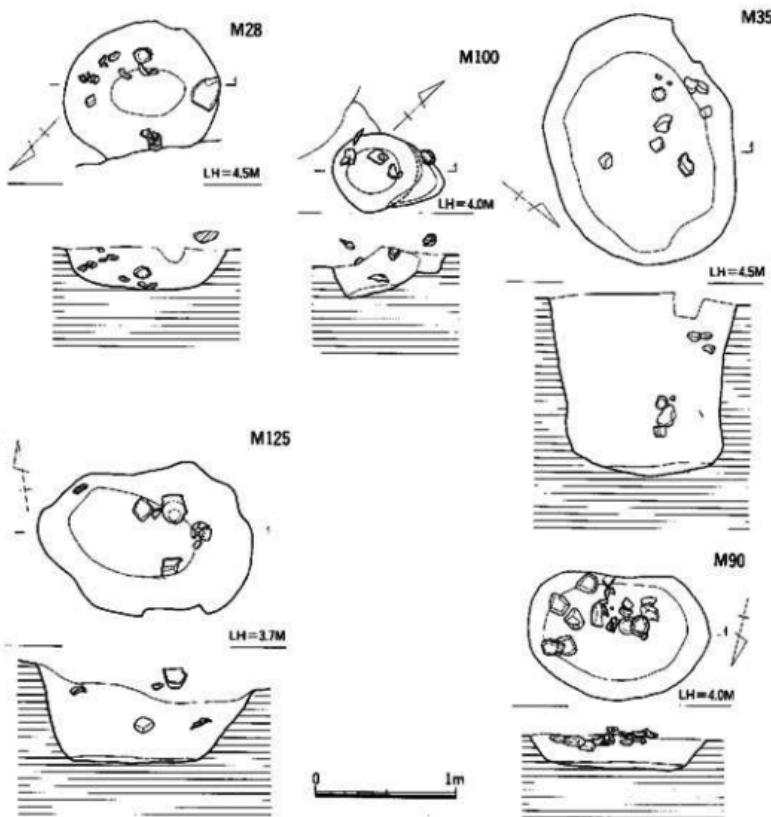


Fig. 23 第28・35・90・100・125号土壤実測図 (1/40)

第25号土壤

II面のD-4・5区にある土壤である。調査区外へ続く。長さ3.0m、幅1.2m、深さ0.7mを測る。出土遺物には口禿の白磁皿 (Fig. 24.410)、鎬蓬弁文青磁碗 (414)、龍泉窯青磁碗 (415)、丸瓦 (413) などがある。

第28号土壤 (Fig. 23、写真39)

II面のG-5区にある円形の土壤である。長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。Fig. 24.414

は龍泉窯青磁の碗の底部である。415は天目茶碗である。416は陶器の皿である。土師皿・坏(417～429)がある。

第35号土壤 (Fig. 23、写真40)

II面のF・G-3・4区にある円形の深い土壤である。長さ1.7m、幅1.6m、深さ1.3mを測る。上部は焼土が落ち込むように堆積していた。出土遺物には口折れの青磁皿(Fig. 24.394)、口禿の白磁皿(395)、土師皿・坏(396～409)がある。

第90号土壤 (Fig. 23、写真41)

III面のG-4区にある長椭円形の浅い土壤である。長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。数個の砾とともに遺物が廃棄してあった。出土遺物には、黄褐釉盤 (Fig. 25.431) や土師皿・坏(432～436)などがある。

第100号土壤 (Fig. 23)

III面のF-4区にある小型の土壤である。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。出土遺物には、龍泉窯青磁碗 (Fig. 25.437)、土師器坏(438)、陶器瓶(439)などがある。



写真39 第28号土壤(西から)

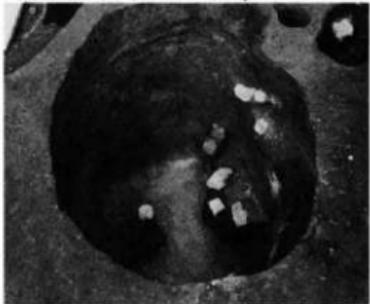


写真40 第35号土壤(北から)



写真41 第90号土壤(東から)



写真42 第104号土壤(南から)

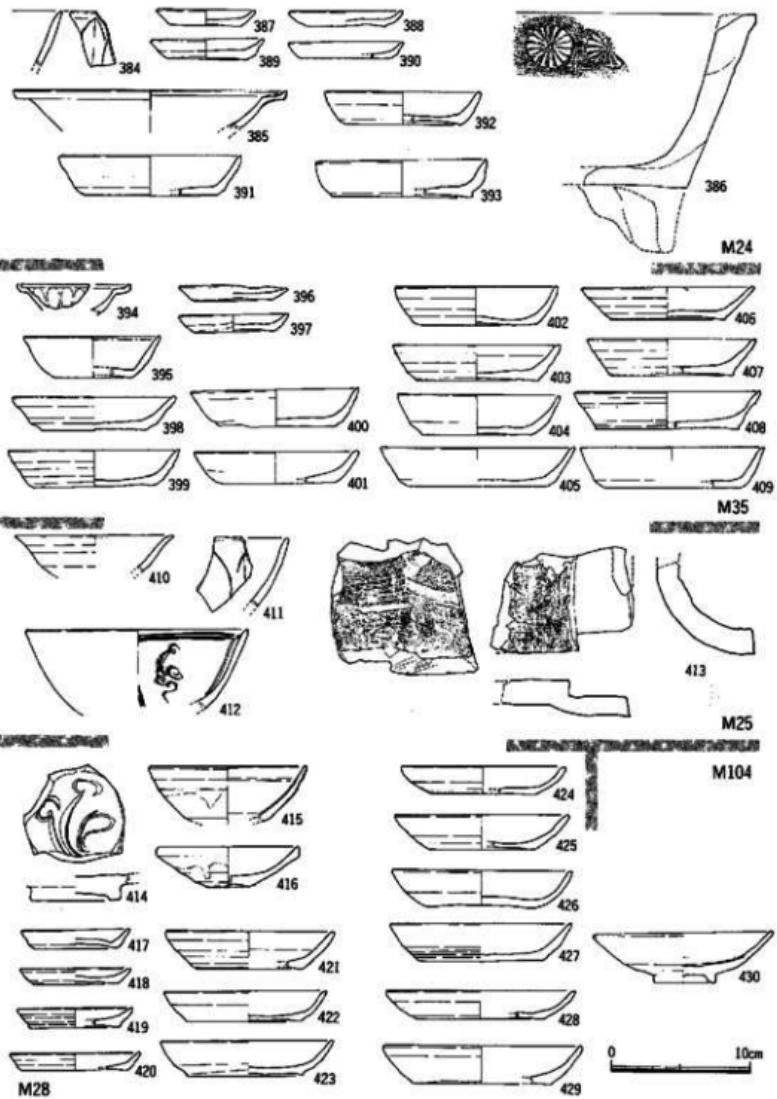


Fig. 24 第24・25・28・35・104号土壤出土遺物実測図 (1/4)

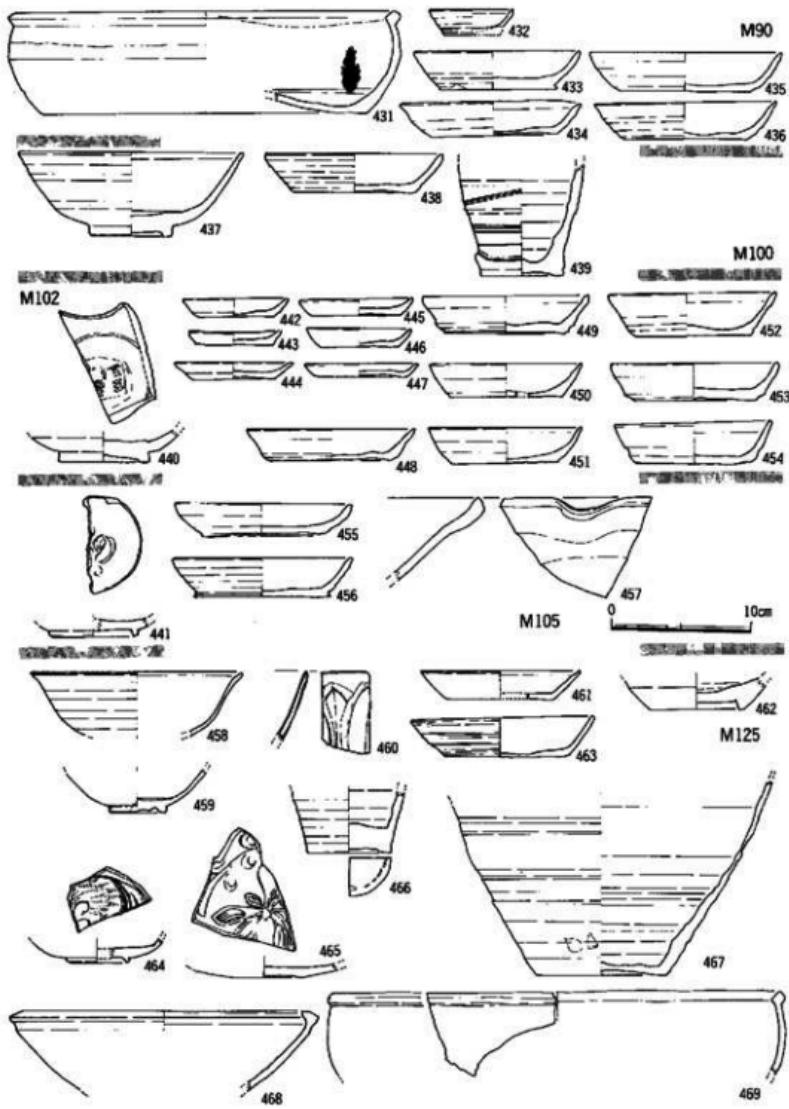


Fig. 25 第90・100・102・105・125号土壤出土遺物実測図 (1/4)

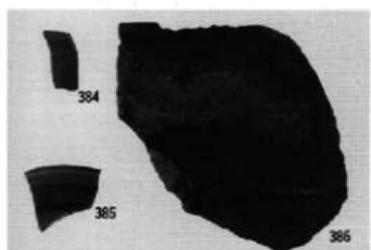


写真43 第24号土壤出土土器

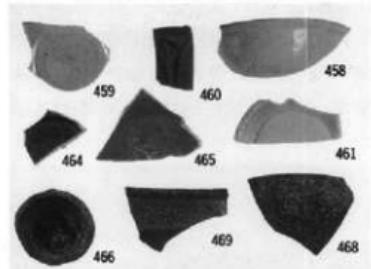


写真44 第125号土壤出土陶磁器



写真45 第35号土壤出土磁器



写真46 第90号土壤出土黄褐釉盤



写真47 第104号土壤出土青磁皿

第102号土壤

III面のE・F-1区にある土壤である。長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物には龍泉窯青磁碗 (Fig. 25.440)、土師皿・坏 (442~449)などがある。440は見込に「金玉滿堂」のスタンプ文がある。

第104号土壤 (写真42)

III面のA・B-2・3区にある円形の深い土壤で、底部付近から口の欠けた青磁の皿 (Fig. 24.430)が一点出土した。長さ0.8m、幅1.2m、深さ0.8mを測る。

第105号土壤

III面のB-2・3区にある土壤である。長さ1.4m、幅1.2m、深さ1.0mを測る。出土遺物には龍泉窯青磁碗 (Fig. 25.441)、土師器の坏 (455~456)、擂鉢 (457)などがある。

第125号土壤 (Fig. 23)

III面のE-4区にある楕円形の土壤である。長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.7mを測る。出土遺物には、口禿白磁碗 (Fig. 25.458~459)、口禿白磁皿 (461)、鎮蓮弁文青磁碗 (460)、青磁皿 (464)、白磁皿 (465)、土師器坏 (463)、陶器瓶 (466)、鉢 (462~468)、壺 (467)、黄褐釉盤 (469)などがある。銅錢は紹聖元寶が1枚出土した。

ここでは粘土貼りの土間状の遺構や掘立柱建物などについて述べる。

II面からIII面にかけて焼土を検出したが、これを除去した段階で、白色の粘土を貼った部分が数か所存在することを発見した。これは部分的に欠落する箇所もあるが、ほぼ長方形のプランをもつものがほとんどである。これらの粘土を掘り下げるとき方形状に礫が並んだものがあり、単なる整地のために投げ込まれたものではなく、意図的に配列したものと思われた。これらはおそらく土間と考えられる。

第29号遺構（写真49・50）

III面のG-1～3区にある粘土を貼った遺構である。第36号土壤に切られる。長さ5m、幅2.5mを測る。白色粘土は厚い部分で10cmほどになる。第36号土壤はこの粘土より上に人頭から拳大の礫が50個あまり敷き詰めたように集中していた。この礫の下は焼けた粘土が堆積していた。電の可能性もある。出土遺物には、輪蓮弁文青磁碗（Fig. 27.470）や青磁碗（471・472）、口禿白磁皿（473・474）、土師皿・壺（475～478）などがある。第36号土壤からは青磁の輪花状の口縁をもつ托（Fig. 27.487）や口禿白磁皿が出土した。



写真48 第96・97号遺構(東から)



写真49 第29・36号遺構(西から)



写真50 第29号遺構(西から)



写真51 第94・95号遺構(東から)

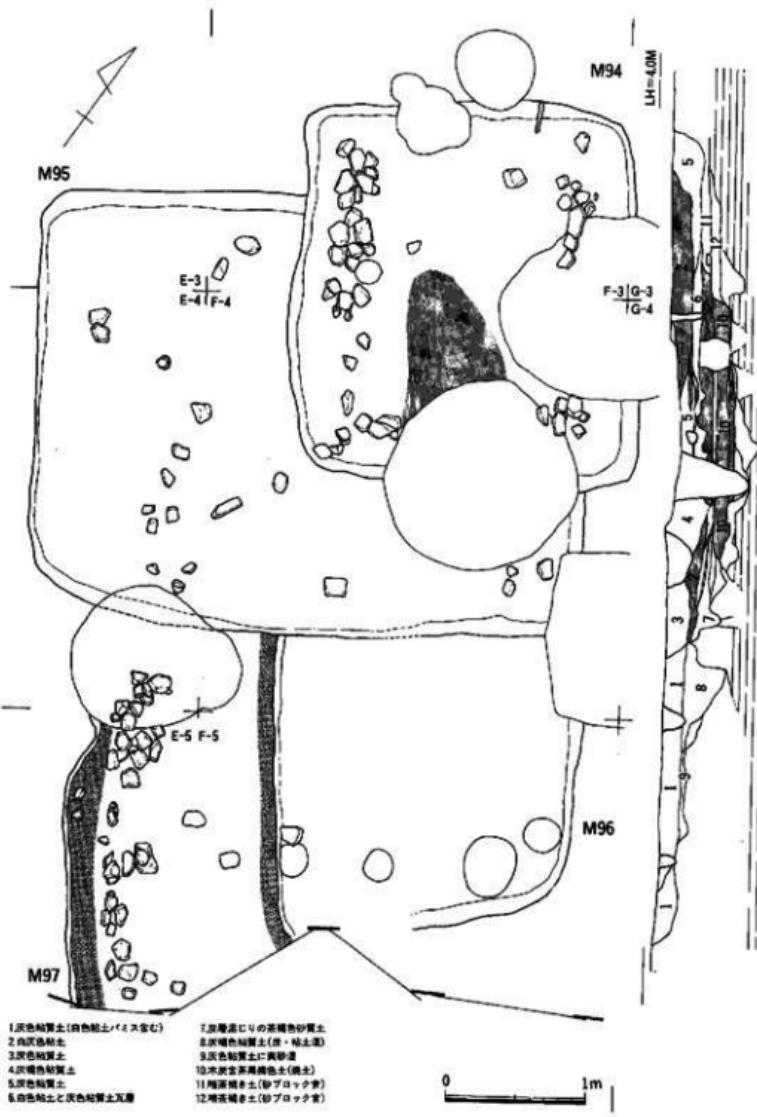


Fig. 26 第94・95・96・97号造構実測図 (1/40)

第94号遺構 (Fig. 26、写真51)

III面のF-3・4区で検出した。第24号土壤に切られる。50個ほどの礫を 1.8×2 mの方形に並べてその上に粘土を敷き詰めている。下の遺構がある軟弱な部分には厚さ20cmの粘土を貼っている。長さ2.8m、幅2.4mを測る。出土遺物には、青磁碗 (Fig. 27.488) や須恵質の擂鉢 (489)などがある。

第95号遺構 (Fig. 26、写真51)

III面のE・F-3・4区で検出した長さ3.9m、幅3.1mの粘土貼りの遺構である。北東部を第94号遺構に切られる。下の礫は20個あまりが散漫に分布している。粘土は15cmほどの厚さである。出土遺物には、青磁の碗・皿 (Fig. 27.491-492) や陶器の壺 (493) などがある。

第96号遺構 (Fig. 26、写真48)

III面のF-4・5区にある長さ2.2m、幅2.2mの粘土貼りの遺構である。西半分を第95号遺構に切られる。粘土の下は黒色の砂層で地山の層である。出土遺物には錦縞弁文青磁碗 (Fig. 27.490) がある。見込みにスタンプ文がある。

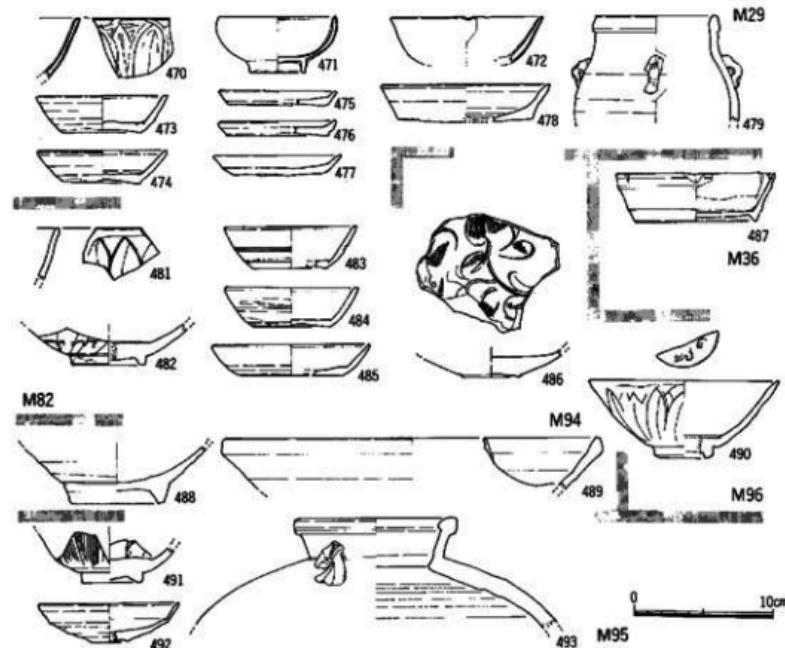


Fig. 27 第29・36・82・94・95・96号遺構出土遺物実測図 (1/4)

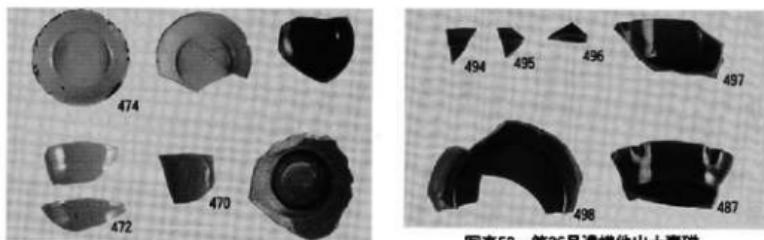


写真53 第36号造構他出土青磁

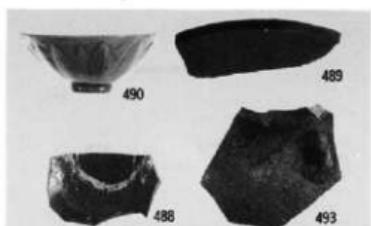


写真54 第82号造構出土磁器

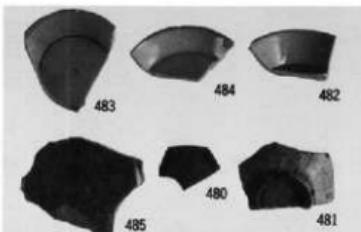


写真55 第94・95・96号造構出土陶磁器

第97号造構 (Fig. 26、写真48)

III面のE・F-5区にある方形の造構である。第95・96号造構に切られ、現存部分で長さ2.8m、幅1.8mを測る。白色粘土の上には焼土が層を成している。約50個ほどの小窓が長軸に沿って、南片に敷かれていた。

第82号造構出土品 (Fig. 27, 481～486) は、当初第94・95・96号造構を同一造構として検出していいた際のものである。鎮蓮弁文青磁碗 (481)、青磁碗 (482)、口禿白磁皿 (483・484)、土師器坏 (485)、龍泉窯青磁皿 (486) などがある。

その他、鍛冶関係造構および掘立柱建物などがある。

第26号土壤 (Fig. 28、写真56)

II面のB-3区で検出した長椭円形の土壤である。内部には西半分を中心に鉄滓が詰まっていた。ほぼ一つの塊になっており、西侧から流れ込んで固まった状態である。溶解炉の排滓用の溝であろうか。長さ1.5m、幅0.4m、深さ0.85mを測る。断面形は「V」字形である。

第81号掘立柱建物 (Fig. 28、写真57)

II面のE・H-5区にある柱穴群である。6個の柱穴が方位N-47°-Eに並ぶ。二個は礎石が存在しない。柱間の距離は平均176.4cmである。西方向に聚がる適当な柱穴がなく、建物はおそらく調査区外に抵がるものと思われる。中世I～II期の間の時期である。

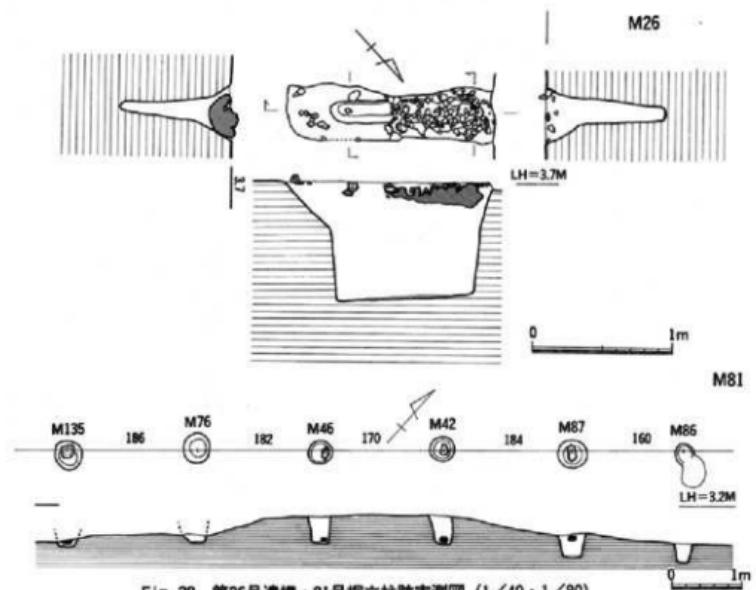


Fig. 28 第26号遺構・81号掘立柱跡実測図 (1/40・1/80)



写真56 第26号遺構(東から)

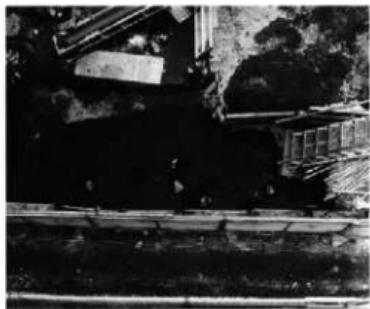


写真57 第81号掘立柱跡(東から)

(3) 中世Ⅲ期

主に地山の砂層上、IV面で検出した遺構群である。溝2条、井戸4基、土壙5基などがある。
第290号溝（写真58）

IV面のG・H-1～5区にある東西に延びる溝である。方位はN-40°-Wである。暗茶褐色の砂を覆土にもつ。検出面がかなり低かったせいもあって、深さは20cmあまりしか残っていなかった。幅は広いところで1mほどである。断面形は緩い「U」字形を呈する。出土遺物は少ないが、同安窯青磁碗（Fig.29.499）や白磁碗（500）などがある。

第300号溝（写真59）

IV面のH・I-4・5区で検出した東西溝である。方位はN-41°-Wである。当初排土置き場として利用していた部分にあたり、西側半分は検出不能であった。また北側は調査区外へ出るため、本来の幅や深さは不明である。第290号溝とは1.8mほど離れている。溝の深さは検出面から1.4mであり、底に近い位置とは考えられるが、まだ壁の傾斜が認められるため基底はより北側にあるものと考えられる。土層もこの範囲ではまだ斜めに堆積している。溝の覆土は上から1.黒褐色砂質土（厚さ18cm）、2.暗茶褐色土（厚さ84cm）、3.茶褐色砂（厚さ26cm）、4.明茶褐色砂（厚さ14cm）、5.黒色粘質土混じりの砂質土（厚さ15cm）、6.茶褐色砂質土（厚さ18cm）となる。

遺物はこの第2層と3層を境に上下の二つの層に分けてとりあげたが、接合する破片も多く、さほど時間幅のあるものとは考えられないことから一括して取り扱う。ただし、おおまかな出土傾向を示せば、青磁類は上層に多く、IV類碗を除いた白磁は下層に多い。なお、溝中からは多量の青磁、白磁、陶器などの輸入陶磁器や土器片とともに、馬の頭骨などが多く出土している。

出土遺物（Fig.29.501～529、Fig.30.530～547、Fig.31.548～584、写真61～64）

出土遺物には白磁、青磁、天目、各種陶器、土師皿・壺、瓦、磚、鉄製品、銅錢などがある。

501～529は白磁の類である。501～506はIV類の碗、507～509、516～524はVI類の碗、510はIX



写真58 第290号溝（掘削前・西から）



写真59 第300号溝（東から）

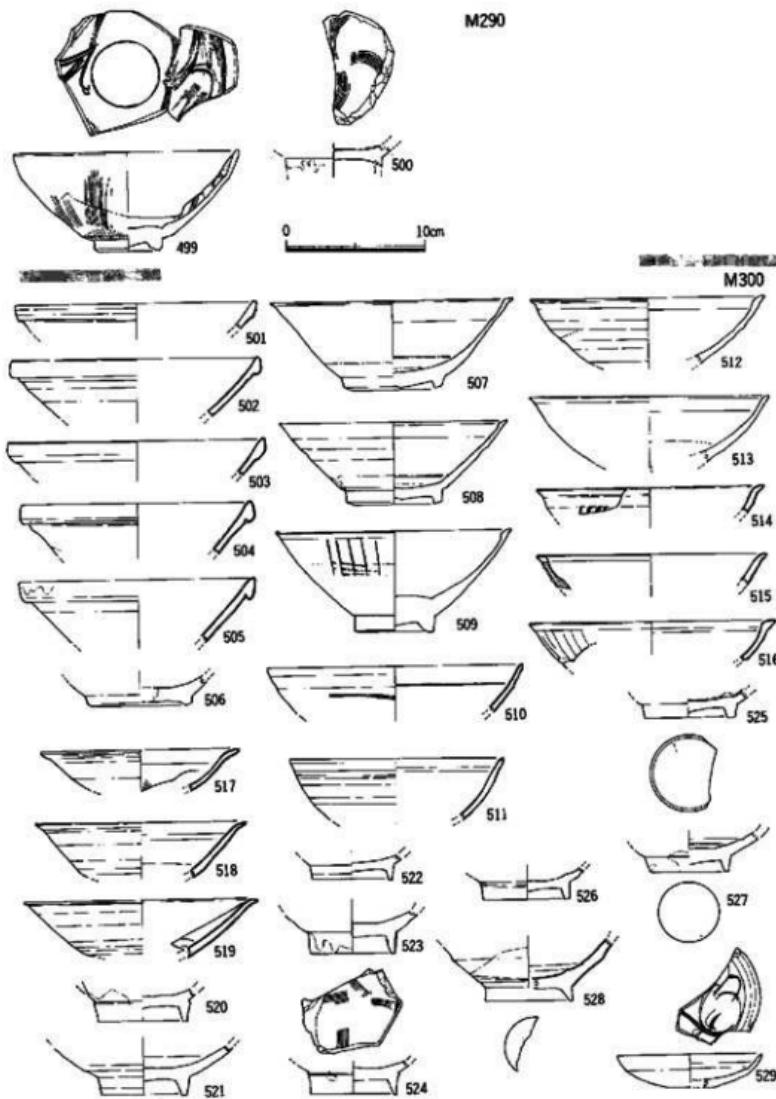


Fig. 29 第290·300号墓出土遗物实测图(1) (1/4)

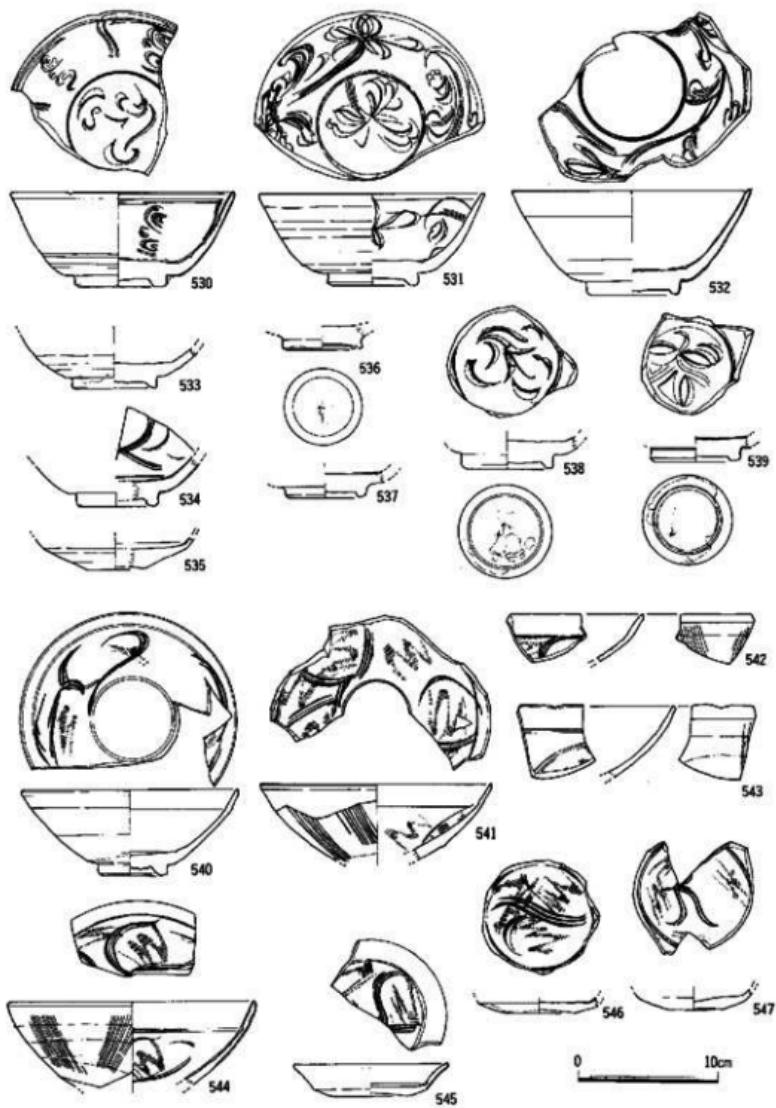


Fig. 30 第300号溝出土遺物実測図(2) (1/4)

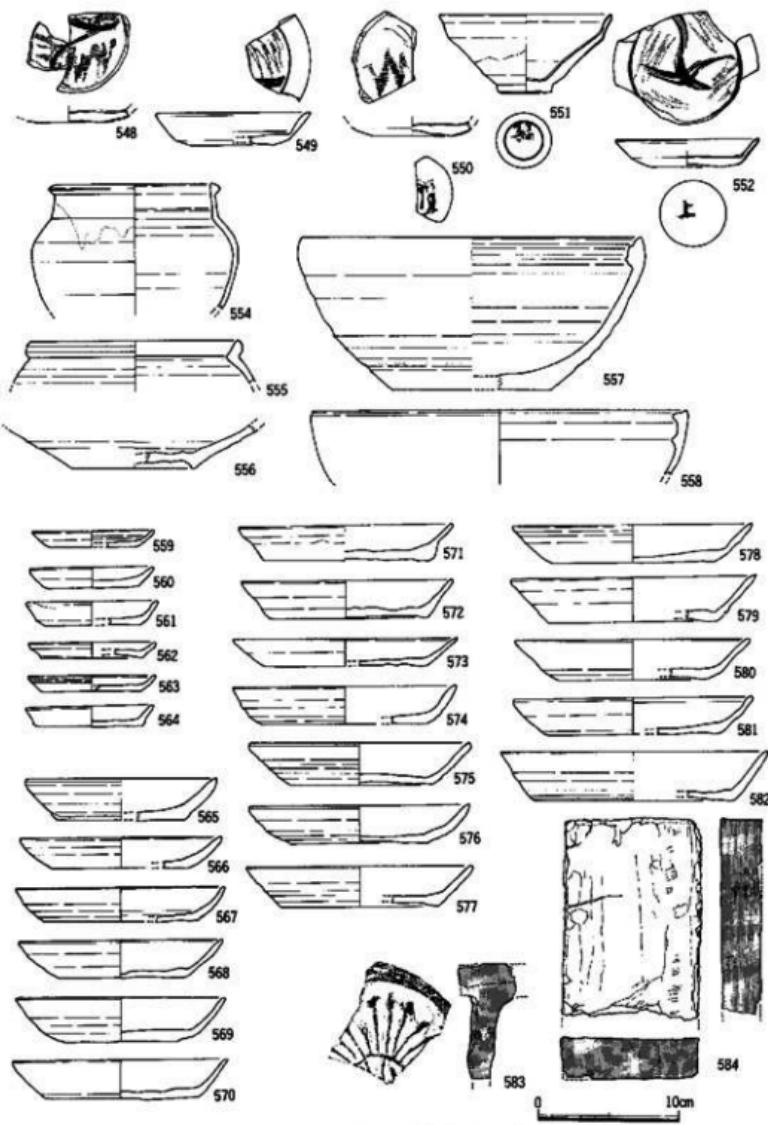


Fig. 31 第300号溝出土遺物実測図(3) (1/4)

類の碗か。525・527・528は墨書が高台内にある。大部分が欠けており、内容は不明である。529はVI類の皿である。

530～552は青磁の類である。530～539は龍泉窯系青磁のI類の碗と皿である。540～544は同安窯系青磁のI類碗、545～550・552・553は同類の皿である。皿の550と552には外底に墨書がある。550は花押らしきもの、552は「上」の字である。

551は天目茶碗である。外底に墨書があるが、判読できない。

554～558は陶器の類である。554・555は壺、556～558は鉢である。

559～560は土師皿・壺である。法量は皿(13枚)が、8～10cm、平均8.96cmで、ピークは9～10cm、壺(22枚)が12～18cm、平均15.2cmで、ピークは15～16cmである。

583は軒丸瓦の瓦当部分である。花の文様がある。584は同じ瓦質の磚である。下層から出土した。

出土遺物からみて、この溝は12世紀後半から13世紀前半の遺物を主体としているが、11世紀の後半には掘られた可能性がある。検出面が任意であったため、本来の掘開面をとらえておらず、明確には断言できない。また埋没の時期についても上部をカットしているため、どこまで下るかは明確でない。しかし、溝の埋め土のほとんどがこの期の遺物で充たされていることから、この時期には溝はあまり機能していなかったと考えられる。

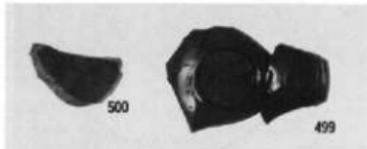


写真60 第290号溝出土磁器

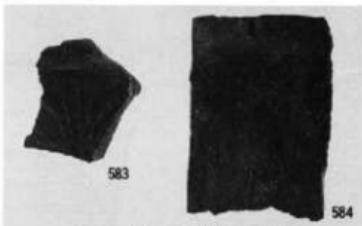


写真63 第300号溝出土瓦・磚

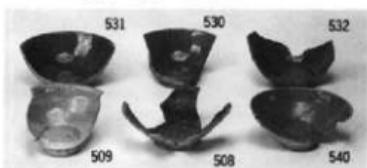


写真61 第300号溝出土磁器碗

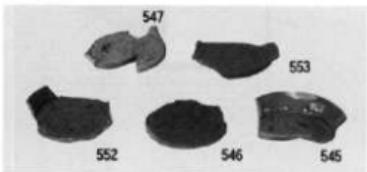


写真62 第300号溝出土磁器皿

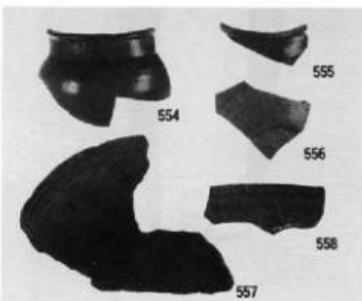


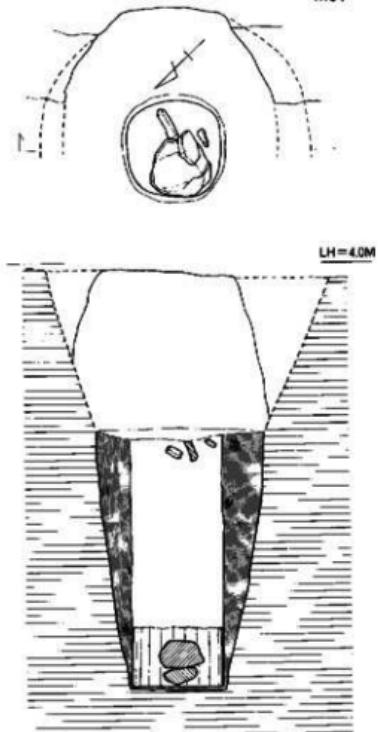
写真64 第300号溝出土陶器

第64号井戸 (Fig.32、写真66)

D-2区で検出した直径 2 m、深さ 3 mほどの井戸である。井戸枠は木桶で、四段分ほどを確認したが、残りが悪く、最下の一段のみしか検出できなかった。井戸枠内には径40cmあまりの礫が投げ込まれていた。

出土遺物には、龍泉窯系青磁 I -1類碗 (Fig.34.585)、同安窯系青磁碗 (586)、土師壺坏 (587)、瓦質土器の火鉢 (588)、高麗青磁鉢 (589) などがある。588は直行する口縁外側に菊花スタンプ文を押している。589は広口の象嵌を施す青磁鉢である。内面に唐草文、外面に團線を描く。高台には珪砂がつく。釉は薄色で、胎土は洗練されている。おおむね13世紀後半から14世紀の年代感のある遺物であり、造構の年代も下る可能性もある。586・587・589は井戸枠内から出土した。

M64



M291

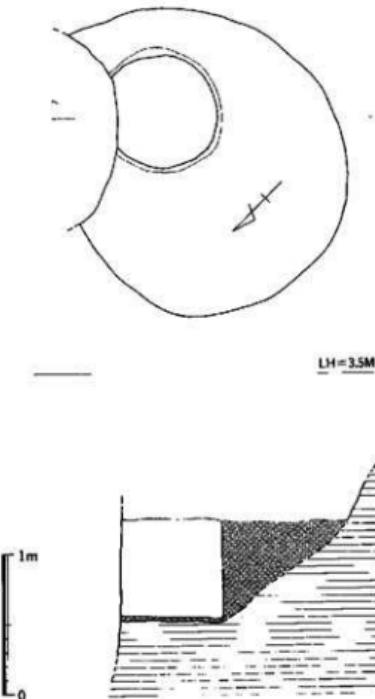


Fig. 32 第64・291号井戸実測図 (1/40)

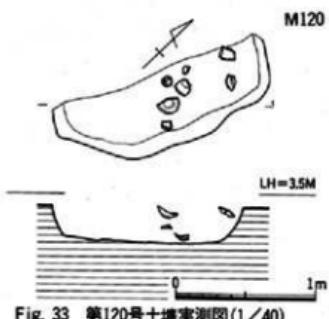


Fig. 33 第120号土壤実測図 (1/40)



写真65 第120号土壤(東から)

第141号井戸

IV面のD・E-1区で検出した井戸である。井戸枠部分しか掘り上げていない。

出土遺物には、龍泉窯系青磁碗 (Fig. 34.590)、土師器坏 (591~595) などがある。

第291号土壤 (Fig. 32、写真67)

C-2区で検出した井戸である。第23号溝に破壊され、最下の井戸枠くらいの面までしか残存していないかった。現存部分の直径は2.2m、深さは0.4mを測る。井戸枠は木桶であるが、残存状態が極めて悪かった。

出土遺物には、碎片であるが白磁碗IV類、糸切り底の土師皿、陶器、瓦などがある。

この他、この時期に属すると考えられる井戸に、第117号 (B・C-3区)、140号 (D・E-4・5区)などがある。

この時期に属する土壤は、第119・120・126・129号土壤などがある。

第119号土壤

II面のC-3区にある土壤である。第23号溝などに大半を破壊されている。本来梢円形のプランをもつものと考えられる。現存部分で長さ1.2m、幅0.34m、深さ0.8mを測る。



写真66 第64号井戸(東から)

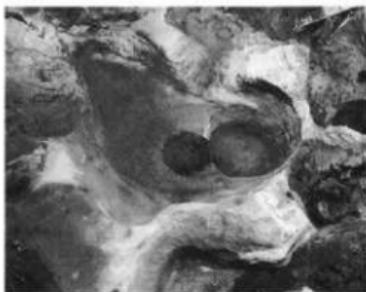


写真67 第291号井戸(東から)

出土遺物には、「李」銘の墨書のある同安窯系青磁碗 (Fig. 34.596) や白磁のVI類碗 (597・598) や土師皿 (599) などがある。

第120号土壤 (Fig. 33、写真65)

II面のC-3区の第119号土壤の北隣で検出した土壤である。第23号溝に西半分を破壊されている。第119号土壤にも切られる。現存部分で長さ1.6m、幅0.55m、深さ0.25mを測る長楕円形

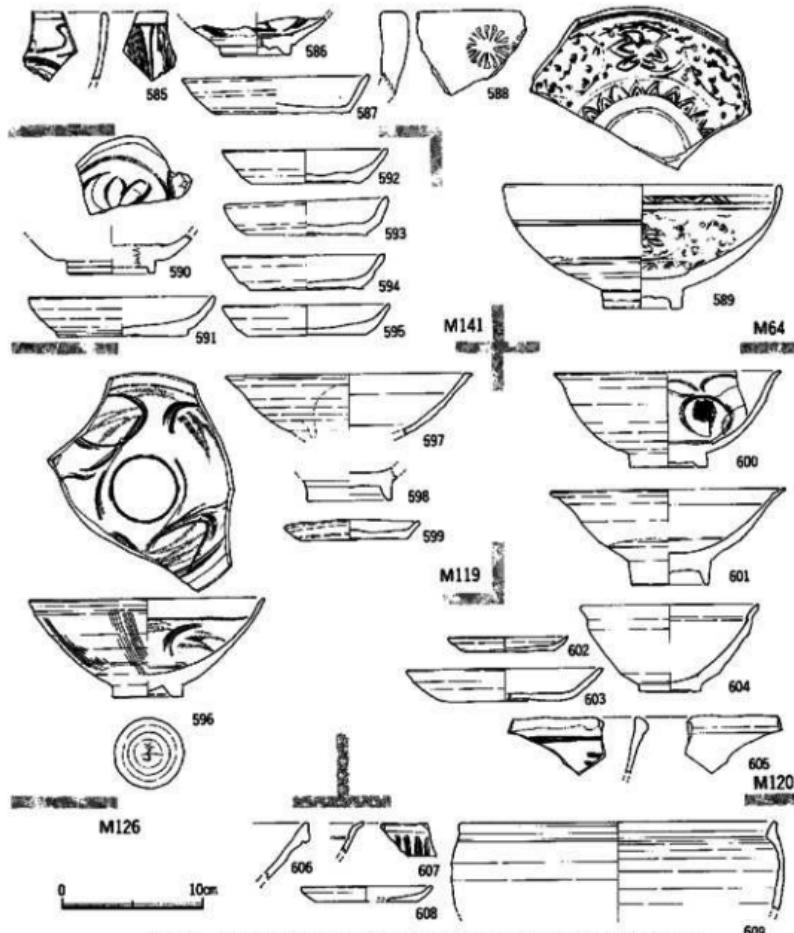


Fig. 34 第64・141号井戸・119・120・126号土壤出土遺物実測図 (1/4)

を呈する。

出土遺物には、龍泉窯系青磁碗 (Fig.34.600)、白磁VI類碗 (601)、天目茶碗 (604)、土師皿・环 (602・603)、須恵質擂鉢片 (605) などがある。

第126号土壙

III面のF-4・5区で検出した断面形が浅いレンズ状を呈する長楕円形の土壙である。第96号遺構の下部にあたる。長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。

出土遺物には、龍泉窯系青磁碗 I類、白磁IV・VI類碗 (Fig.34.606・607)、土師皿 (608)、陶器鉢 (609) などがある。

第129号土壙

III面のF-2・3区にある小型の楕円形を呈する土壙である。長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.5mをはかる。覆土は暗茶褐色のやわらかい締まりのない土である。

出土遺物には、龍泉窯系青磁碗 I類、白磁碗VI類、陶器、土師皿、瓦などがある。

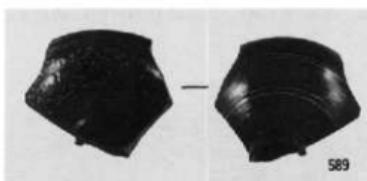


写真68 第64号井戸出土高麗青磁鉢



写真69 第119号土壙出土青磁碗

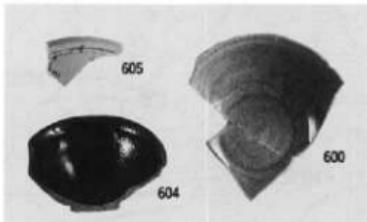


写真70 第120号土壙出土磁器



写真71 第120号土壙出土白磁碗

(4) 中世IV期

最終面で確認した遺構である。土壙や柱穴がほとんどである。遺構の種類と数は井戸1基、土壙10基、瓦廐棄土壙1基、柱穴多数である。

第127号土壙 (Fig.35)

IV面のF-2区で検出した長方形の土壙である。長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。

出土遺物には、同安窯系青磁碗 (Fig. 36.647) や白磁碗Ⅶ類 (648~649) の他に陶器、瓦器碗、須恵器碗などがあり、主体は白磁である。

第138号土壌 (Fig. 52、写真72)

IV面のC・D-2・3区で検出した橢円形の土壌である。井戸や他の遺構に破壊されており、現存部分で、長さ1.3m、幅1.4m、深さ0.5mを測る。炭や灰の層が縦状に堆積しており、その中から遺物が多量に出土した。その下部には淡茶褐色の砂の層があり、弥生時代の遺物を含んでいた。二時期の遺構を掘りまちがえた可能性がある。

出土遺物には、白磁碗IV・VI・IX類 (Fig. 36.610~613)、白磁小碗 (614)、白磁盤 (615)、陶器四耳壺 (617)、土師皿・壺 (618~628) などがある。

第165号土壌

IV面のD-3区で検出した土壌である。第107・137・140号井戸や第138号土壌に切られ、全形はほとんどわからない。覆土は、明茶褐色砂の間に黒色の炭の層が挟まれていた。

出土遺物には、白磁碗IV・VI類 (Fig. 36.630~633、写真77.638)、土師皿 (634~637) がある。

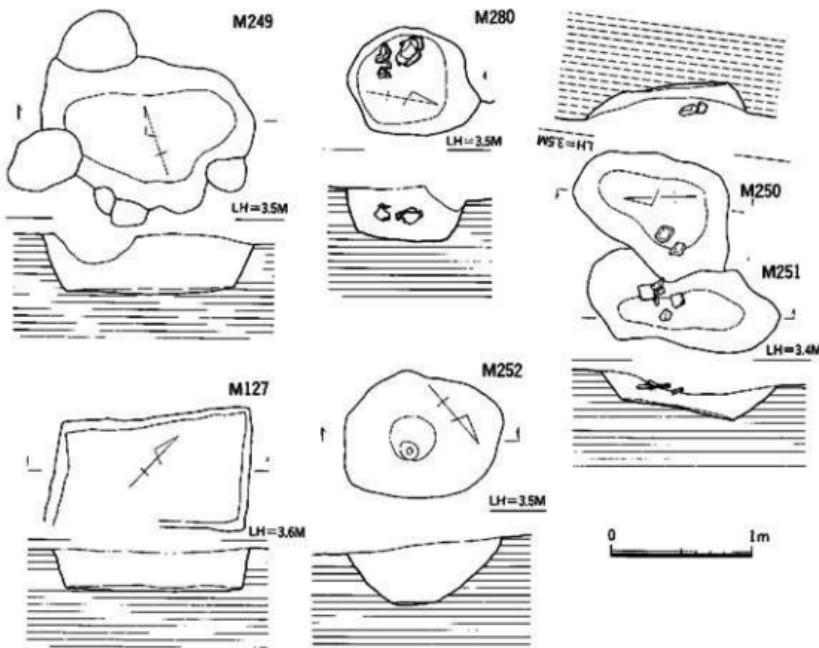


Fig. 35 第127・249・250・251・252・280号土壌実測図 (1/40)

土師皿は634以外はヘラ切り底である。

第249号土壙 (Fig.35)

IV面のF-3区にある長梢円形の土壙である。長さ1.6m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。

出土遺物には、白磁碗V類 (Fig.37.663) や糸切り底の土師皿 (664) がある。

第250号土壙 (Fig.35、写真73)

IV面のF-3区で検出した不整梢円形の土壙である。第251号と接する。長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。

出土遺物には、青白磁輪花皿 (Fig.36.639)、陶器瓶 (640) などの他に、白磁碗IV類、および鉄絵白磁碗、糸切り底の土師皿、瓦器碗などがある。640は底に「久口」の墨書がある。

第251号土壙 (Fig.35、写真73)

第250号土壙の東側に接して検出した不整梢円形の土壙である。長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。

出土遺物には、白磁II・IV・VI類碗 (Fig.36.641~644)、土師皿 (645)、黄褐釉盤 (646) の他に、同安窯系青磁の小片が混じる。646は盤の底部の破片を短冊形に成形して、その中に「張西」もしくは「張一四」という墨書を施している。



写真72 第138号土壙(東から)



写真73 第250・251号土壙(東から)



写真74 第280号土壙(西から)



写真75 第121号土壙(西から)

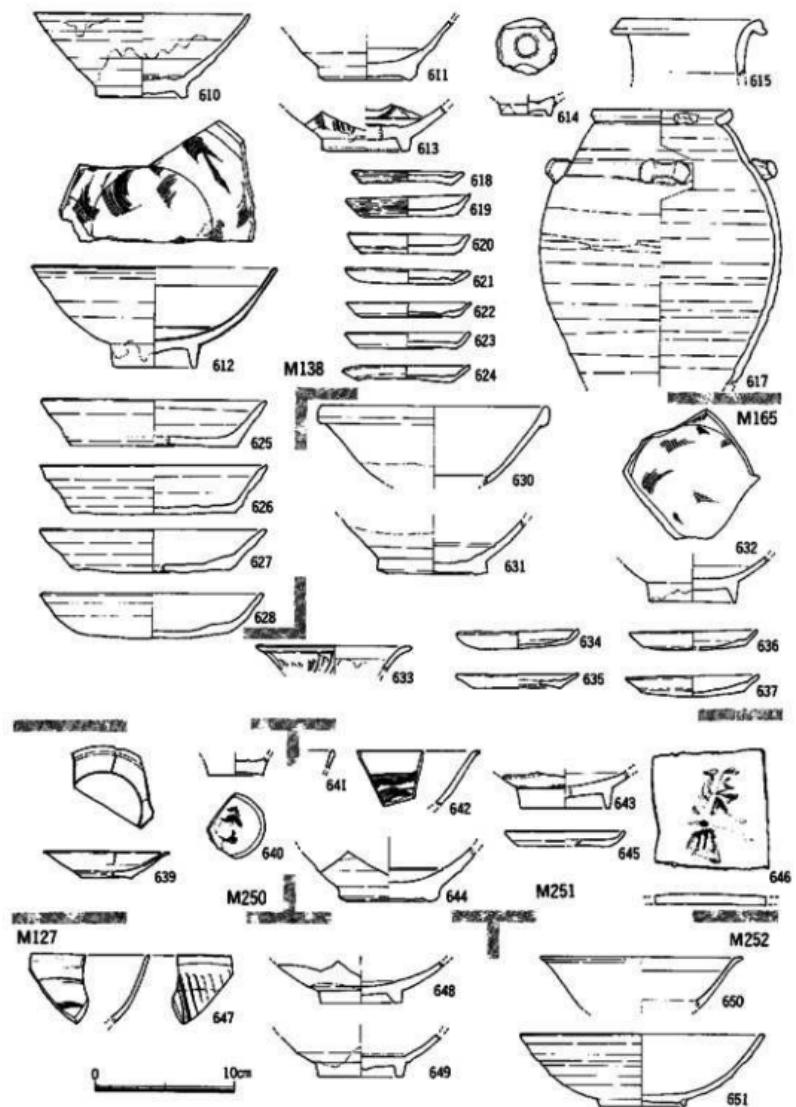


Fig. 36 第127・138・165・250・251・252号土壤出土遺物実測図 (1/4)

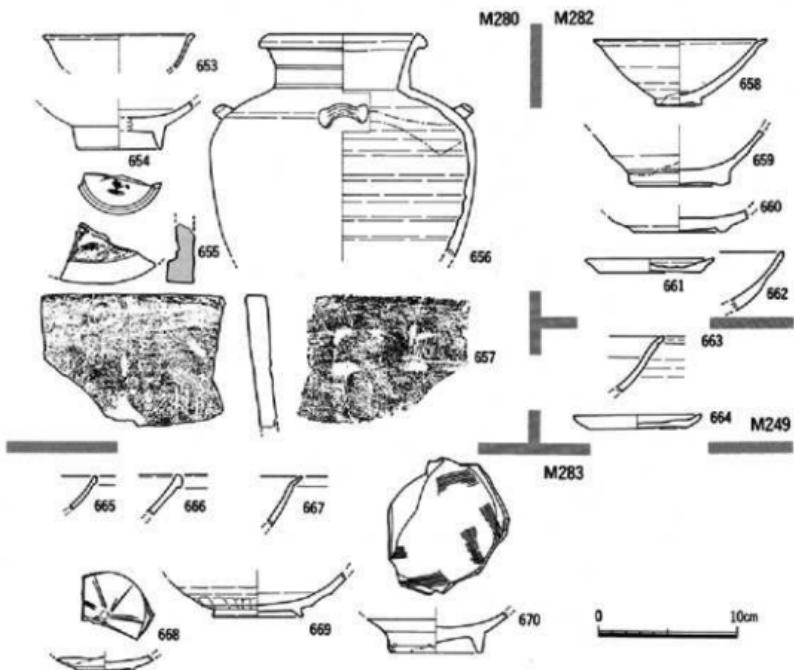


Fig. 37 第249・280・282・283号土[●]出土遺物実測図 (1/4)

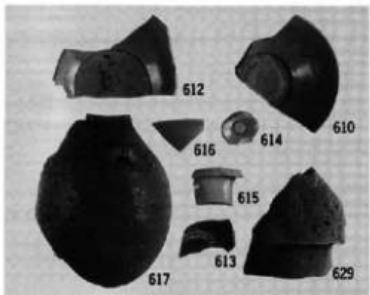


写真76 第138号土壤出土遺物

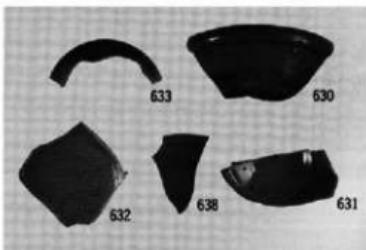


写真77 第165号土壤出土白磁

第252号土壤 (Fig. 35)

IV面のF-2区で検出した梢円形の小型の土壤である。長さ1.2m、幅0.94m、深さ0.6mを測る。

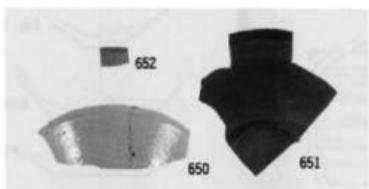


写真78 第252号土壤出土土器



写真79 第280号土壤出土白磁壺

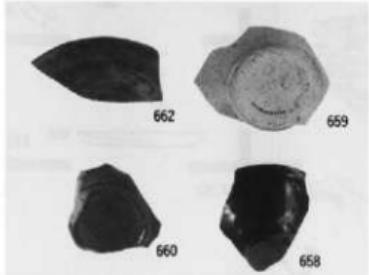


写真80 第282号土壤出土土器

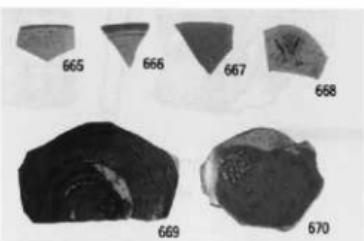


写真81 第283号土壤出土土器

出土遺物には、白磁II・VI類碗 (Fig. 36.650・写真78.652) や瓦器碗 (651) などがある。

第280号土壤 (Fig.35、写真74)

IV面のF-2区で検出した円形の土壤である。長さ0.95m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。

出土遺物には、白磁碗VI類 (Fig.37.653-654)、四耳壺 (656)、軒丸瓦 (655)、平瓦 (657)などがある。654は外底に「金」もしくは「□王」の墨書きがある。

第282号土壤

IV面のG-3区にある円形の土壤である。井戸で一部破壊されており、直径は1.4m、深さ0.6mを測る。

出土遺物には、天目茶碗 (Fig.37.658)、白磁IV類碗 (659)、瓦器碗 (660-662)、糸切り底の土師皿 (661) の他に、黄褐釉盤、ヘラ切り底土師皿、同安窯系青磁碗小片などがある。

第283号土壤

IV面のF・G-2区にある楕円形の大型土壤である。長さ2.8m、幅2.2m、深さ0.4mを測る。

出土遺物には、白磁II・V・VI類碗 (Fig.37.665~667-670)、平底皿 (668)、瓦器碗 (669)などがある。この他、黄褐釉盤、須恵器、瓦などがある。

第121号土壤 (写真75)

III面のG-2区で検出した円形の瓦を廃棄した土壤である。直径80cm、深さ20cmあまりの穴にコンテナ1箱ほどの瓦が詰まっていた。瓦は軒平瓦 (Fig.38.671)、丸瓦 (672~674-682)、平

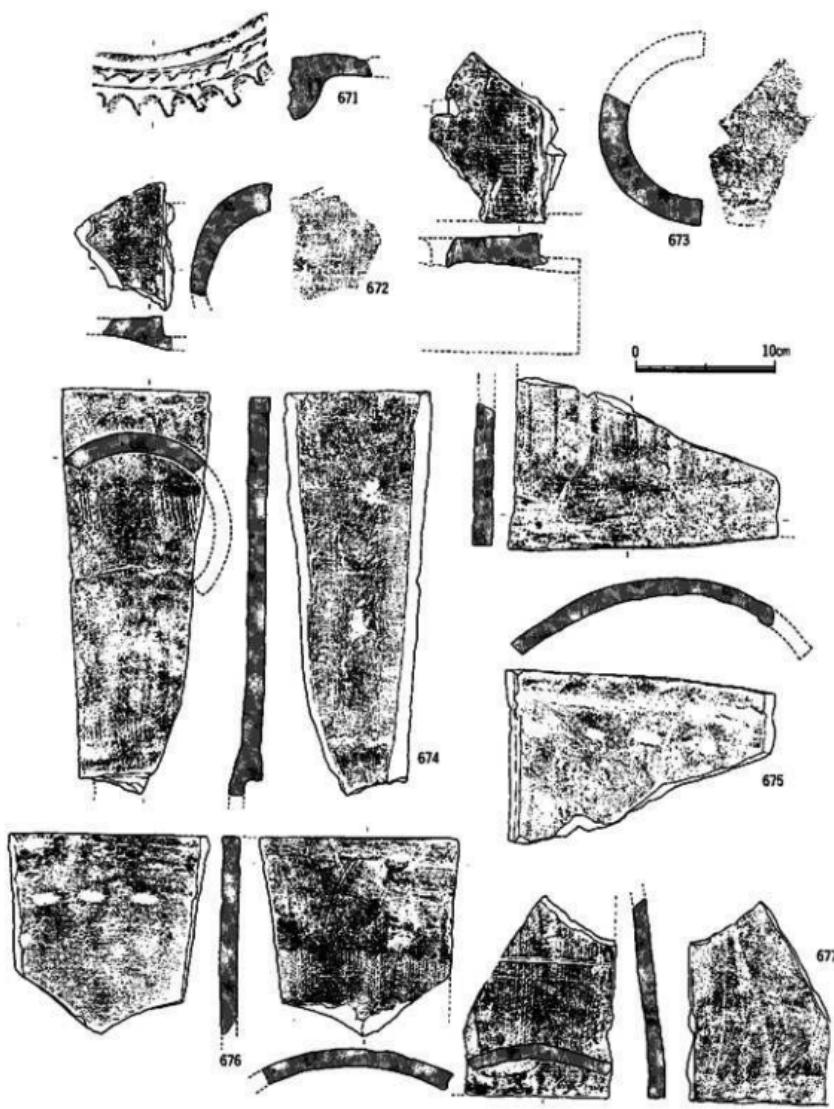


Fig. 38 第121号土塘出土瓦实测图(1) (1/4)

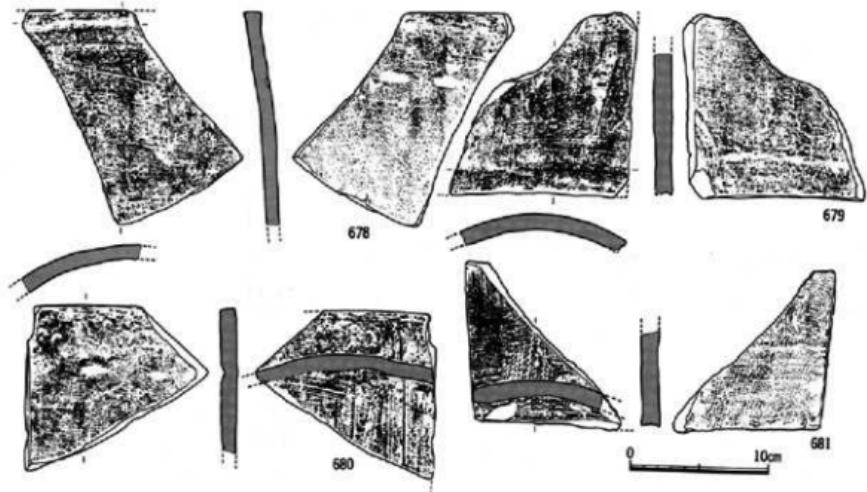


Fig. 39 第121号土壤出土瓦実測図(2) (1/4)

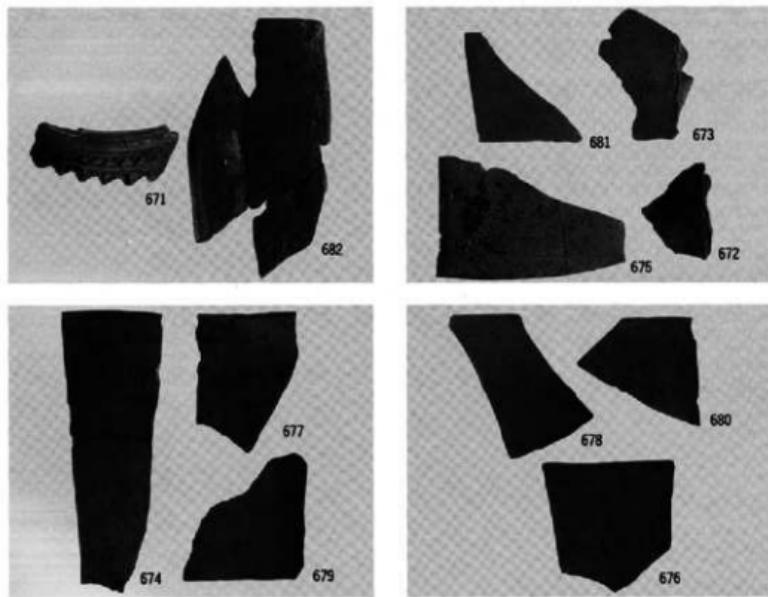


写真82 第121号土壤出土瓦

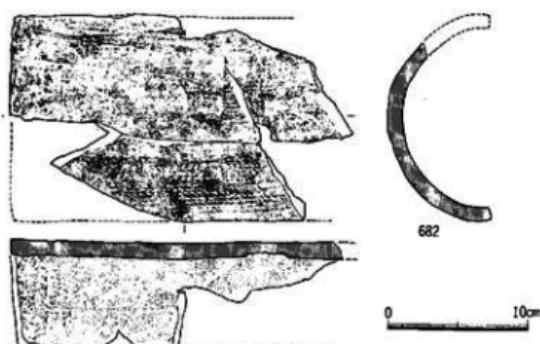


Fig. 40 第121号土壙出土瓦実測図(3) (1/4)

(5) 包含層・その他の遺構出土陶磁器

ここでは、包含層および遺構から出土したものの中で貴重と思われるものを選別して掲載した。

Fig. 41. 683は明の染付皿で、小野分類C群に属する。内面には「寿」の人形化した文様、外面には簡便な唐草文を描く。684は白磁の端反り皿である。いずれも16世紀代に属する。

685は縞蓮弁文青磁碗である。686は同じく縞蓮弁文の青磁の小碗である。687は口禿の白磁皿、688・689は口禿の白磁碗である。497・498は青磁の輪花口縁の托である。二本の蘂状の凸帯をもつ。

690～694、写真83は墨書き器をまとめた。690は白磁の皿で、墨書きは不明。691は白磁碗の底で、「丁網」と書く。692も白磁碗で、「古」と読めるが、花押の可能性もある。693・694は龍泉窑青磁の皿および碗で、墨書きはそれぞれ「王二」、「十」である。712・713は白磁碗で、「王」と「万」と読める。713～717も白磁の碗であるが、破片であるため墨書きの内容は不明。

695は瀬戸のおろし皿である。696は唐物の茶入れで、いわゆる大海である。明るい茶褐色の釉に黒い斑点がある。胴の中程に細い沈線がある。697は李朝の粉青沙器の瓶の胴部片である。雨滴文の象嵌がある。698は白濁した釉をかける小型の陶器盤である。699は黄褐釉の盤で、鉄絵の三角文様を描く。

700・写真83. 710・711は下縁に波状の指押さえによる文様をもつ軒平瓦である。701は軒丸の瓦当である。花の文様がある。

702は青磁碗の底部である。見込には「月」のスタンプ文がある。外面の文様は片切彫りの花弁であろう。703は白磁の水注の口縁部の破片である。704～707は合子の蓋である。704は青白

瓦(675～681)などがある。いずれも内面に布目压痕と桶の蓋の压痕がある。瓦の他に、細片ではあるが、白磁II・VI頃碗や糸切り底の土師皿などが出土している。

磁の身、705・706は蓋で、山桜や花の型押し文様がある。707は暗いオリーブ色の釉がかかる蓋で、魚の文様がある。708は口禿の白磁皿である。709は青磁の高台付の皿で、白く柔らかい胎土に黄色味がかったオリーブ色の釉がかかる。

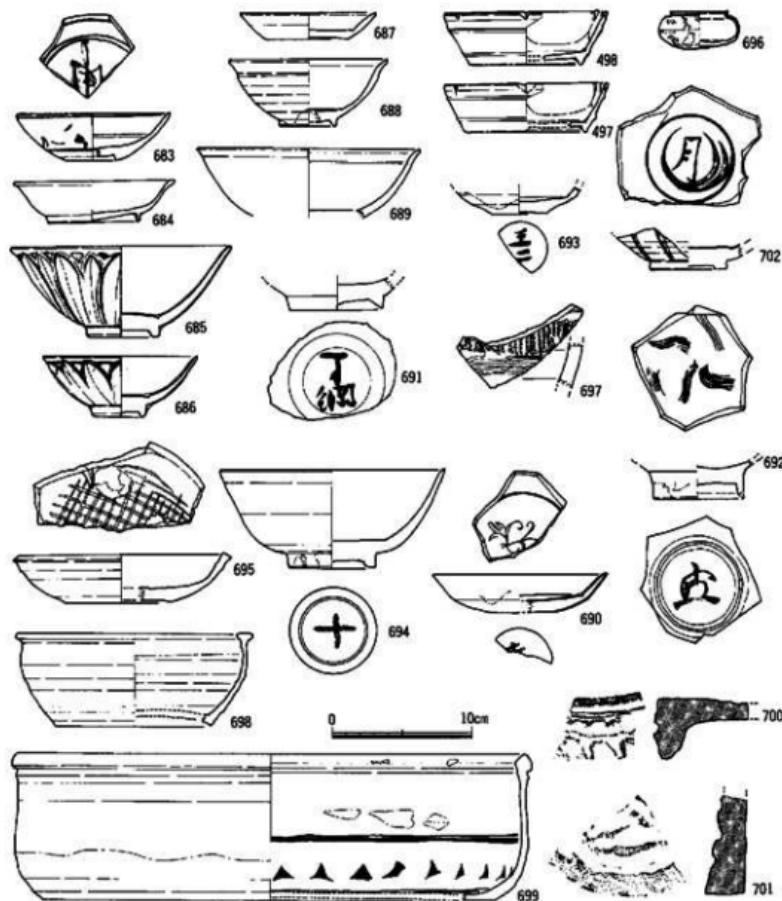


Fig. 41 包含層および各遺構出土遺物実測図 (1/4)



写真83 包含層および各造構出土遺物

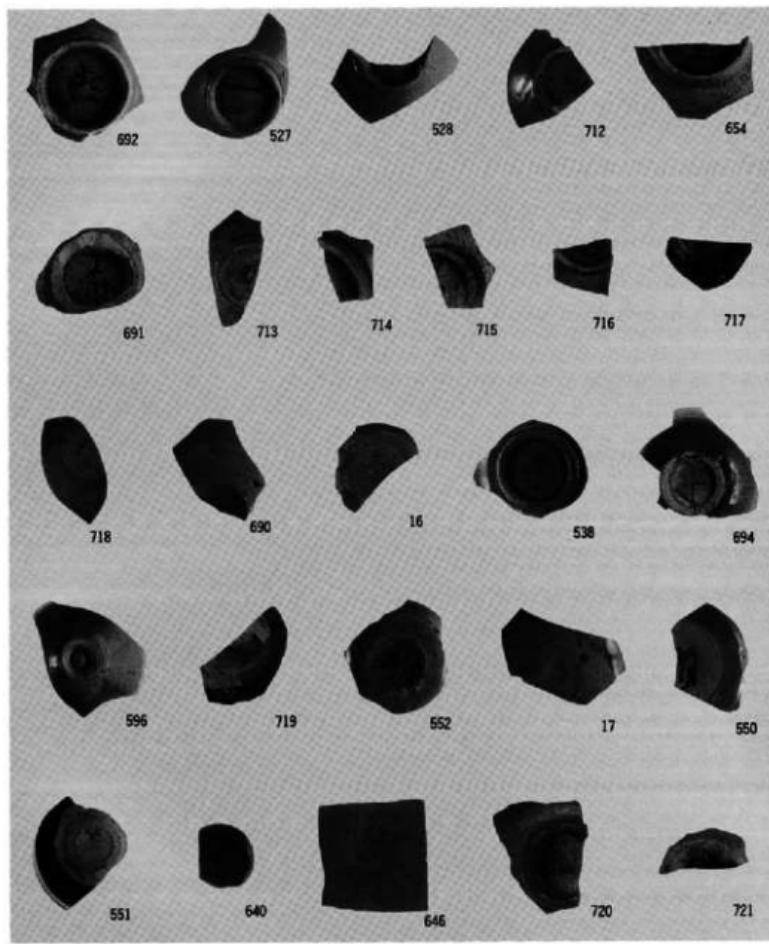


写真84 墓古土器

4. 石製品

石製品としては、石鍋、硯、砥石、滑石製品(石鍋再利用品)、碁石、槌杖球、礫石器などが
ある。

石鍋 (Fig. 42.722~728、写真87.729・730)

滑石製の石鍋はほとんどが破片で、総計85点出土した。口縁部はすべて鋤付のタイプである。胴が残るものは722のように丸みを帯びている。直線的に外方へ延びる胴をもつ小型のもの(723)もある。

硯 (Fig. 43.731~734、写真92)

硯は全部で6点出土した。すべて赤紫の凝灰岩製である。731は長方形で、包含層出土の2個体から成る。接点がなく図上で復元している。732は三角形の硯である。下の辺は折れたままで、面取りを施していない。733は脚付の硯の海の部分の破片である。734は途中から剥離した破片である。

砥石 (Fig. 43.735~755、Fig. 44.763~766、写真88・90)

砥石はかなり多量に出土した石製品のひとつである。種類としては、粘板岩を主な材料とした小型の手持ち砥（板砥石）、砂岩製の置き砥がある。

Fig. 43の735~755は板砥石である。長さが7cm以下、幅3cm、厚さ5mm前後のものが多い。赤や黄、灰色の粘板岩の薄い破片を、鍛引で加工して使用している。刀子などの小型の刃物用として使用されたのであろう。

Fig. 44の763は砂岩製の長方形の砥石である。手持ち用の砥石であろう。鍛引きの痕跡が残っている。764は砥石の破片と思われるが、一面に文字状の彫り痕がある。765は黄色の粘板岩の長方形の破片である。側面は磨いた痕跡があり、平面上にもわずかに研磨された痕跡があることから、おそらく砥石として使用されたものと考えられる。766は砂岩製の置き砥である。正面と両側面を使用している。正面の窪んだ面には、刃物らしき痕跡が認められる。

滑石製品（石鍋再利用品）(Fig. 44.767~783、写真91)

滑石もしくは石鍋を再利用したと思われる製品の種類には、コテ状製品、スタンプ、鍤（沈子）、棒状・円盤状製品、温石などがある。この他、破碎した石鍋を再利用するための加工途上のものがある。

767~770・771は石鍋を再利用したコテ状製品である。つまみは石鍋の鉢の部分に相当し、コテあての部分は石鍋の内面にあたる。これは、スタンプも同じような再利用の加工法を行っている。成型は粗い鑿による削りでなされている。コテあての部分はなめらかに磨き上げられている。771のつまみには孔が穿たれている。

769はスタンプである。つまみには紐通し用の孔が穿たれている。スタンプの文様は鷦などの猛禽類で、その脚の部分が残存している。768・782は、文様は刻まれていないが、コテとしては小型で、スタンプとして加工される途上のものの可能性がある。

772~779は用途不明の滑石製品である。772・773は円盤状、777~779は棒状の製品である。775は緑色の粒子の粗い滑石を使用している、776とともに鍤として使用されたものであろうか。

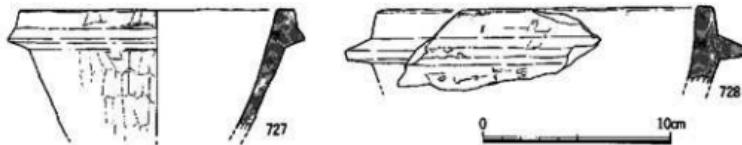
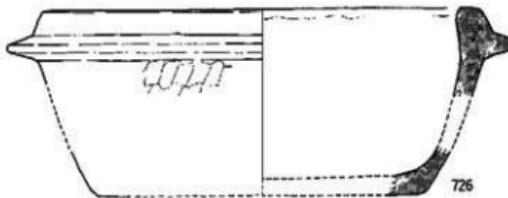
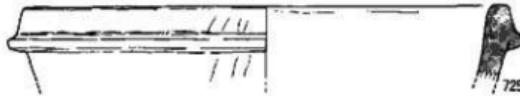
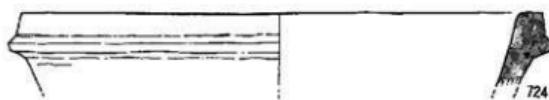
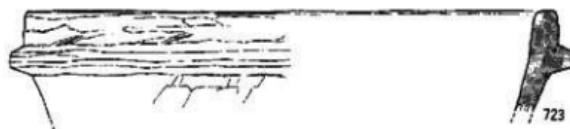


Fig. 42 石器実測図 (1/3)

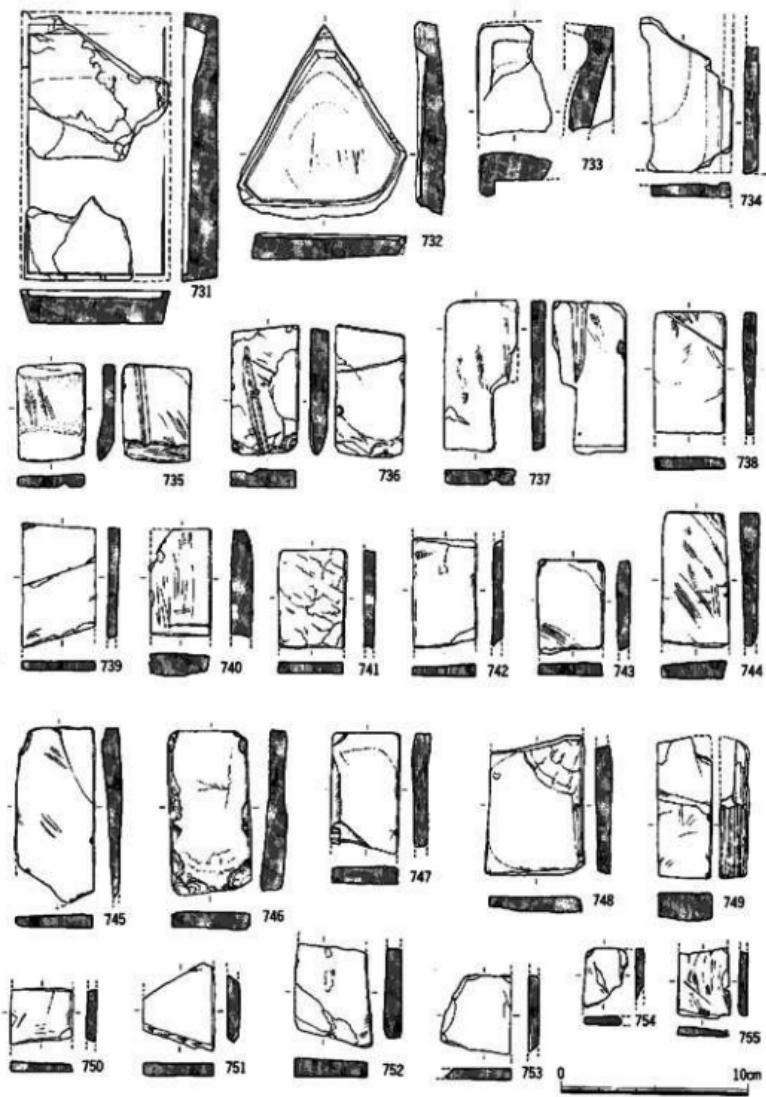


Fig. 43 石製品実測図(1) (1/3)

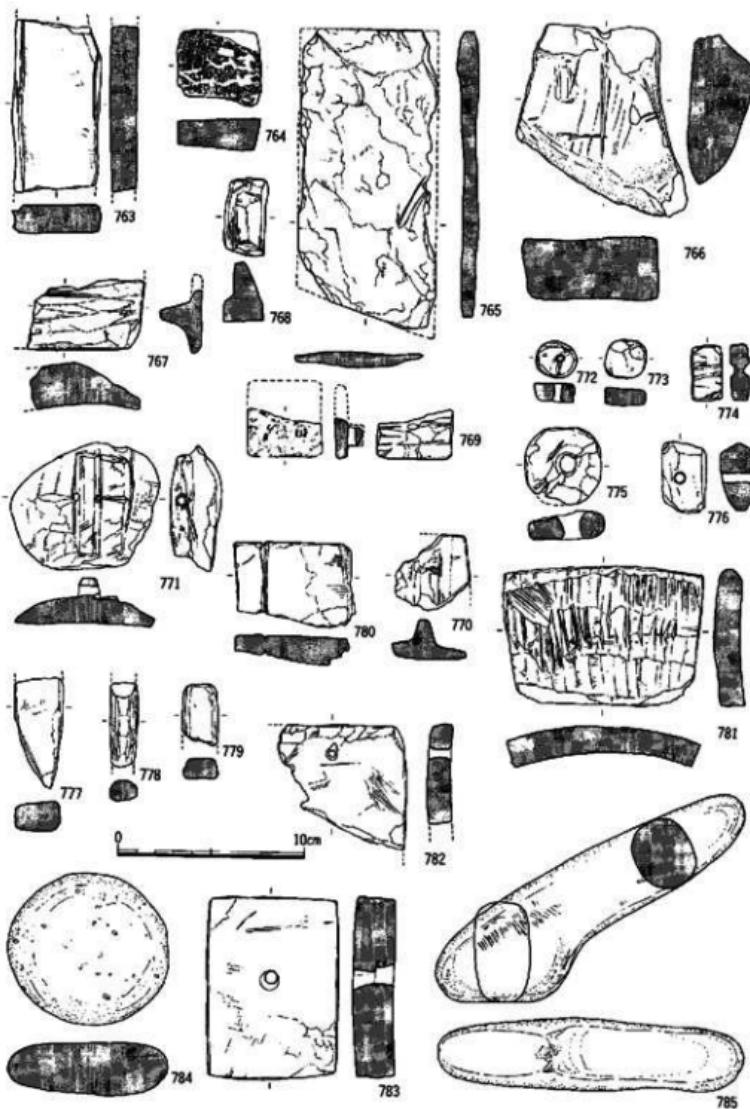


Fig. 44 石製品実測図(2) (1/3)

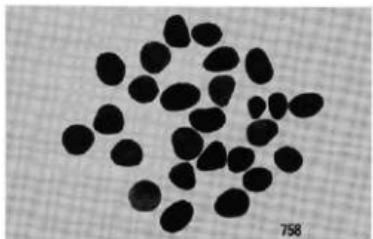


写真85 磨石

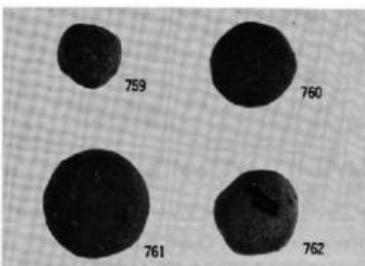


写真86 研杵玉

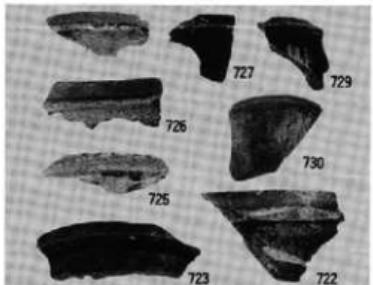


写真87 石鍋

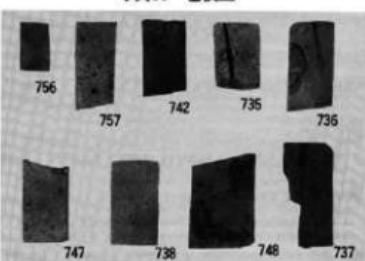


写真88 砥石

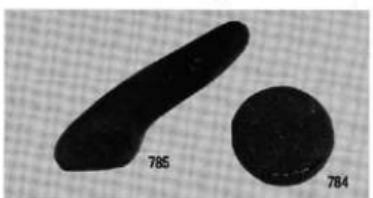


写真89 磨製石器

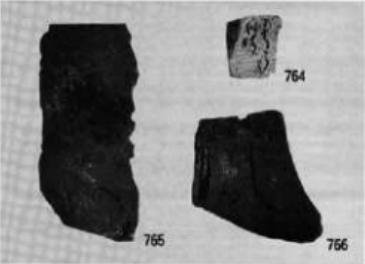


写真90 砥石

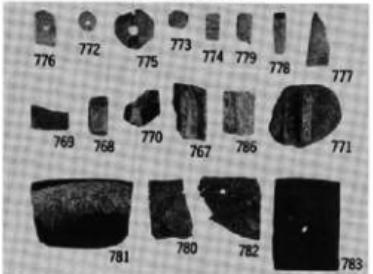


写真91 清石製品



写真92 砚

780・781は石鍋の再利用品で、加工途上のものである。780は二ヶ所に鋸引きの痕跡が認められ、一端はそこで折れている。781は石鍋の口縁から胴部にかけての大きな破片の側面を面取りし、短冊状にしたもので、温石として利用しようとした可能性もある。

礫器 (Fig.44.784・785、写真89)

784・785は火山岩製の硬質の礫を用いた石器である。784は偏平な円礫の両面が滑らかになってしまっており、磨石の可能性がある。785は棒状の把手をもつ杵（櫛）に似た製品で、先端の面が擦れて平坦になっている。臼などと一緒に粉碎具として使用された可能性がある。

碁石 (写真85)

青黒色をした偏平な玉砂利を利用している。総計で44点出土しているが、そのほとんどが第10号埋甕遺構などの近世の遺構から出土している。

槌杖球 (写真86)

砂岩製の球を丸く加工して使用している。総計4個出土している。大きさは直径2cmから4cmほどである。

5. 土製品

土製品としては、土鉢、棒状製品、輪羽口、埴堀、瓦玉、面子、磁器人形、鈴などがある。

土鉢 (Fig.45.787～795、写真93)

すべての環状の土鉢である。長さ3cm、重量5g以下の小型品と長さ5cm、重量20g前後の中型品の二種類がある。総計で11点で、その内訳は、包含層その他出土6点、近世2点、中世II期3点である。

棒状製品 (Fig.45.796～798、写真93)

土製の断面方形の棒状製品で、両端はややすぼり三角形に近い形になる。田村遺跡群や那珂遺跡などの中世の村落遺跡での類例が知られる。用途不明。

輪羽口 (Fig.45.800～803、写真93)

輪の羽口は全部で4点出土した。時期別には、包含層出土1点、近世1点、中世II期2点である。

埴堀

総計で4点出土した。時期別には、包含層出土3点、中世II期1点である。輪の羽口の出土傾向と合わせると、数は少ないが、中世II期に鉄造関係の遺物が多いことがわかる。

このほか瓦玉・面子 (Fig.45.799、写真93.60・804) などがある。

磁器製人形は伊万里の高麗製人の頭部の破片である。

鈴は全部で10点出土しているが、包含層出土8点、中世I期遺構出土2点である。

この他、土製品ではないが焼けた壁土が中世I期からII期の遺構から若干出土している。

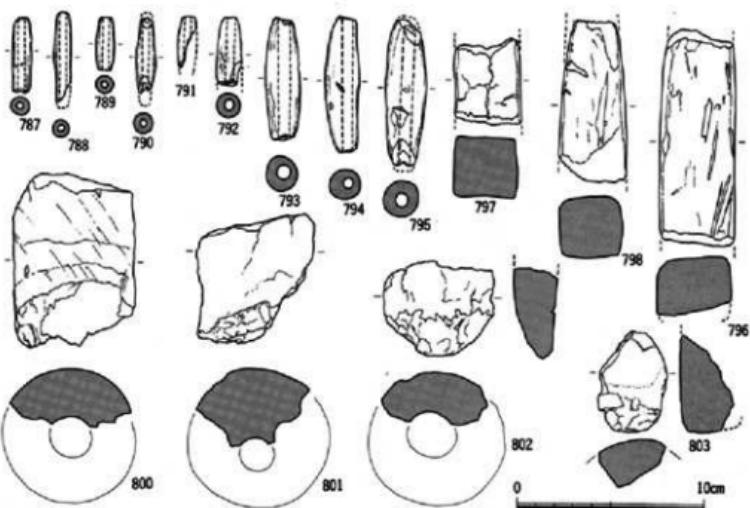


Fig. 45 土製品実測図 (1/3)

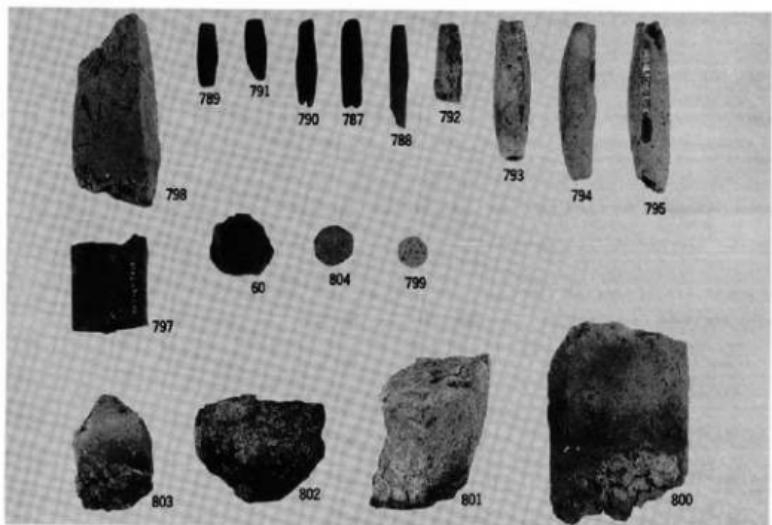


写真93 土製品

6. 金属製品

金属製品には、素材別に、銅製品、鉄製品がある。

銅製品 (Fig. 46.805~815、写真95・96)

総数で63点出土した。種類としては、煙管、鉢、容器、刀装具、飾り金具、耳かきなどがあるが、小型の飾り金具が多い。

805は鉢である。第23号溝から出土した。806は容器の把手部分である。ねじり模様が施されている。第32号土師皿廐塙から出土した。807は鉢である。808は刀装金具で口金物の可能性がある。809は鉢である。812は目抜きであろう。810は引き手金具である。第9号遺構から出土した。811は筒状の金具であるが、用途は不明。815は上面観が「コ」の字形を呈する飾り金具である。外面は金を塗る。宝珠形の飾りがある。透かしが二箇所にある。第32号土師皿廐塙から出土した。813・814は耳かきである。813はII面の焼土層から出土した。

鉄製品 (Fig. 46.816・817)

鉄製品は総計で276点出土した。その種類には、短刀(10)、刀子(21)、紡錘車(2)、釣り針(1)、鉤(1)などがあるが、ほとんどは釘もしくは形状不明なものである。

816は釣り針の破片であろう。813は紡錘車の重りの部分で、両端は破損している。



816



817



815

写真94 鉄製品

写真95 銅製飾金具



805



806



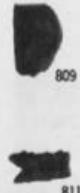
809



810



807



811



812



808



813



814

写真96
銅製品

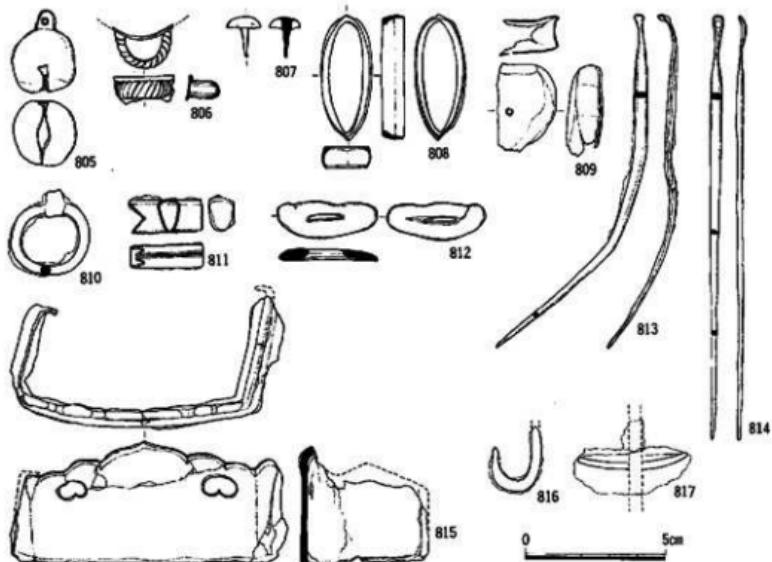


Fig. 46 金属製品実測図 (1/2)

7. 銅銭

出土した銅銭の総数は、320枚で、うち142枚を判読した。その率は44%である。銭銘の判明したものの中訳は、表1に示したとおりであるが、五铢銭（後漢）2枚、唐錢16枚、北宋錢118枚、南宋錢3枚、寛永通宝3枚で、北宋錢が83.1%と最も多く、その比率は他の出土渡来銭の調査傾向とほぼ一致している。

遺構より出土したのは150枚で、出土遺構の時期は13世紀以降とくに13世紀後半から14世紀初頭にかけての土師皿廐棄場からの出土が最も多い。遺構の時期と銭の初鋤年代には、およそ200年ほどの開きがある。南宋以降の銭は、16世紀以降の遺構にしか含まれない。遺構出土のうち銭銘の判明したものの約67%は13世紀後半から14世紀初頭にかけてのものである。これは、今回の調査結果がこの時期の遺構を多く含むことも理由と考えられるが、南宋貿易による北宋錢の大量輸入と国内における市場経済の発達による貨幣の広範な流通など、内外の事情を反映しているものと思われる。

錢名	時代	初鑄年代	出土枚数				時期別 枚数
			通 標	匱合層	そ の 他	合計	
五銖	後漢	後期	2			2	2(1.4)
開元通寶	唐	621	10	4	1	15	
乾元重寶	唐	758	1			1	16(11.3)
平化通寶	北宋	976		1	2	3	
太平通寶	北宋	990	1	1		2	
太平通寶	北宋	995	1			1	
太平通寶	北宋	998	3			3	
太平通寶	北宋	1008	1	1	1	3	
太平通寶	北宋	1008		1		1	
太平通寶	北宋	1017		4	4	4	
太平通寶	北宋	1023	2	2		2	
太平通寶	北宋	1034	4	1		5	
太平通寶	北宋	1039	17	5	1	22	
太平通寶	北宋	1054		1		2	
太平通寶	北宋	1056	1			1	
太平通寶	北宋	1064	2			2	
太平通寶	北宋	1068	6	3		9	
太平通寶	北宋	1078	6	7	1	14	
太平通寶	北宋	1086	7	3	2	12	
太平通寶	北宋	1094	3	2		5	
太平通寶	北宋	1101		3	1	6	
太平通寶	北宋	1102	1	1		2	
太平通寶	北宋	1102		3		3	
太平通寶	北宋	1107	1	2	1	4	
太平通寶	北宋	1111	4	2	1	7	
太平通寶	北宋	1119		2		2	
開元通寶	南宋	1174	1		1	2	
開元通寶	南宋	1208	1			1	3(2.1)
算水通寶	江戸	1625	1	2		3	3(2.1)
			79(55.6)	53(33.9)	12(8.5)	142	142

表1 銅錢別出土数一覧

通標	時期	登録No	錢名	時代	初鑄年代	通標	時期	登録No	錢名	時代	初鑄年代
1	近世	2001	開元通寶	唐	621	32	中世II	2049	五铢銭	後漢	後期
4	近世	2002	紹聖元寶	北宋	1094	2050	開元通寶	唐	621		
5	近世	2004	嘉祐元寶	北宋	1034	2054	皇宋通寶	北宋	1039		
9	近世	2009	咸平元寶	北宋	998	2307	元祐通寶	北宋	1086		
		2013	神符元寶	北宋	1008	2055	政和通寶	北宋	1101		
		2279	皇宋通寶	北宋	1039	2056	政和通寶	北宋	1111		
		2011	明道元寶	北宋	1032	33	中世II	2063	開元通寶	唐	621
		2010	熙寧元寶	北宋	1068	2071	開元通寶	唐	621		
		2008	元豐通寶	北宋	1078	2076	開元通寶	唐	621		
		2005	元豐通寶	北宋	1078	2308	開元通寶	唐	621		
10	近世	2014	開元通寶	唐	621	2078	乾元重寶	唐	758		
16	近世	2022	皇宋通寶	北宋	1039	2075	淳化元寶	北宋	990		
19	近世	2023	淳化元寶	南宋	1174	2059	天聖元寶	北宋	1023		
23	中世I	2031	咸平元寶	北宋	998	2058	景祐元寶	北宋	1034		
		2032	皇宋元寶	北宋	1034	2060	皇宋通寶	北宋	1039		
		2025	皇宋通寶	北宋	1039	2065	皇宋通寶	北宋	1039		
		2106	皇宋通寶	北宋	1039	2069	聖宋通寶	北宋	1039		
		2107	嘉定通寶	南宋	1208	2070	聖宋通寶	北宋	1039		
		2024	宣和通寶	江戸	1636	2081	熙寧元寶	北宋	1068		
11	中世II	2016	開元通寶	唐	621	2082	元豐通寶	北宋	1078		
		2019	開元通寶	唐	621	2291	元豐通寶	北宋	1078		
		2021	政和通寶	北宋	1111	2064	元祐通寶	北宋	1086		
24	中世II	2036	咸平元寶	北宋	998	2067	元祐通寶	北宋	1086		
		2033	皇宋通寶	北宋	1039	2072	元祐通寶	北宋	1086		
		2035	皇宋通寶	北宋	1039	2079	元祐通寶	北宋	1086		
29	中世II	2041	皇宋通寶	北宋	1039	2309	紹聖元寶	北宋	1094		
31	中世II	2045	五銖銭	後漢	後期	2062	聖宋元寶	北宋	1101		
		2047	熙寧元寶	北宋	1068	2057	大觀通寶	北宋	1107		
		2044	元豐通寶	北宋	1078	2080	政和通寶	北宋	1111		
		2043	宋聖元寶	北宋	1102	34	中世II	2084	皇宋通寶	北宋	1039

造幣	時期	登録No.	銘	時代	初鑄年代
37	中世II	2085	嘉祐通寶	北宋	1066
65	中世II	2088	聖宋元寶	北宋	1101
67	中世II	2091	皇宋通寶	北宋	1039
82	中世II	2092	淳平元宝	北宋	1064
88	中世II	2093	天聖元寶	北宋	1023
		2094	元祐通寶	北宋	1086
90	中世II	2095	熙寧元寶	北宋	1068
93	中世II	2101	聖宋通寶	北宋	1039
		2100	皇宋通寶	北宋	1039
		2102	治平元寶	北宋	1064
		2103	元豐通寶	北宋	1078
94	中世II	2105	熙寧元寶	北宋	1068
107	中世II	2109	皇宋通寶	北宋	1039
		2110	聖宋元寶	北宋	1068
108	中世II	2111	元祐通寶	北宋	1086
109	中世II	2113	開元通寶	唐	621
		2112	至道元寶	北宋	995
125	中世II	2116	綱祐元寶	北宋	1094
163	中世IV	2117	景祐元寶	北宋	1034

表2 造幣別出土銭一覧

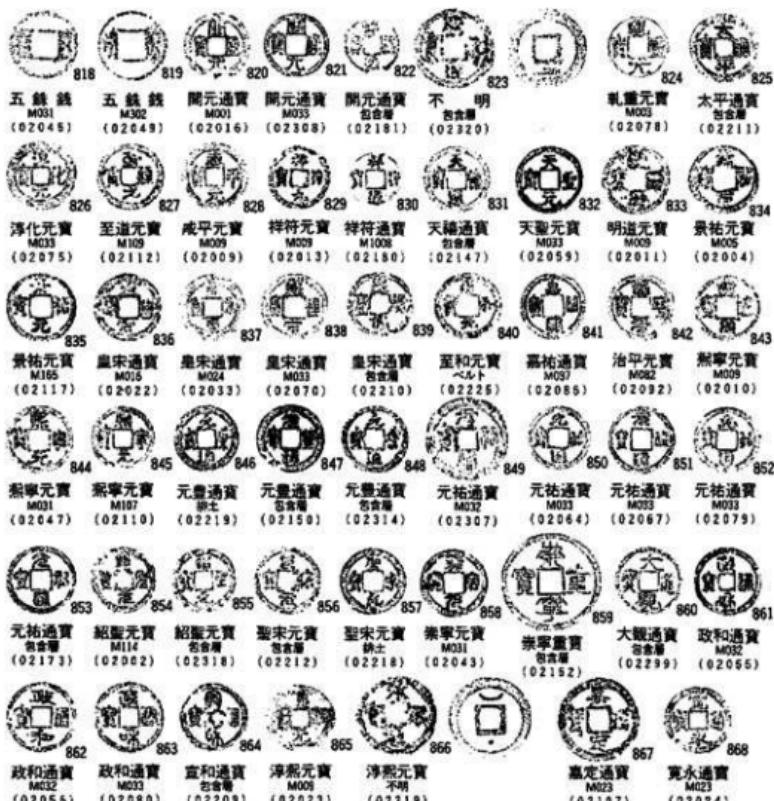


Fig. 47 銅錢拓影 (1/2)

8. 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代に属する住居址2基、土壙1基と若干の遺物を検出した。ここではその概要について述べる。

第123号住居址 (Fig. 48. 写真97-98)

III面のA・B-3区にかけて検出した円形の竪穴住居址である。大半を第26・103・105号土壙などの中世の遺構に破壊されており、しかも南部と東部は調査区外へ出るため、その正確な規模は不明である。現存部から推定すると直径4mほどの大きさになると想えられる。壁の立ち上がりは、残りのよい部分で30cmほどである。現存部のはば中央の80×90cmの範囲に赤く焼けた砂の

面がみられ、その周辺に土器などが散乱していた。炉と考えられる。柱穴は北と南端に一箇所ずつ検出したが、規則性をもつものではなく、検出もれの可能性が高い。出土遺物には、弥生式土器の變形土器、変形土器、石庖丁などがある。

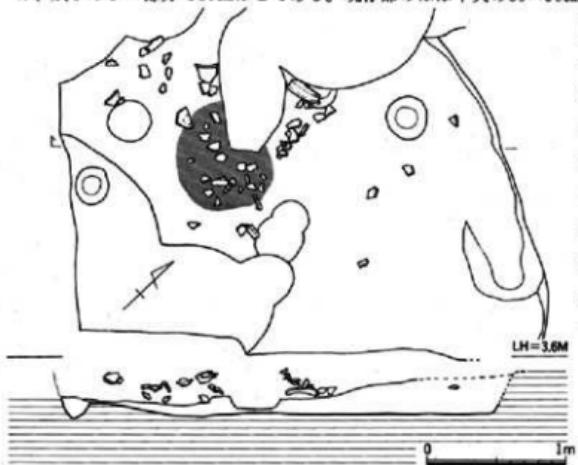


Fig. 48 第123号住居址実測図 (1/40)



写真97 第123号住居址 遺物出土状況(南から)



写真98 第123号住居址(南から)

出土遺物 (Fig. 49.869~879、写真100・102)

破片点数にして50点あまりの弥生式土器が出土した。869は壺形土器の口縁部片である。肥厚させた口端部をもつ。870は同じく壺形土器の口縁部の破片である。外端に沈線を巡らし、その上下に刻み目を施す。872は壺形土器の口縁部片で、逆「L」字形に折れるように口端部を作る。肩に三角凸帯を一条巡らしている。873~877は壺形土器の口縁～胴部の破片である。肩部に凸帯を付けるもの (873~876) と付けないもの (874~875+877) の二者がある。873は口縁に刻み目を施している。871・878はそれぞれ壺形土器と壺形土器の底部である。879は石庖丁の破片である。外弯刃で、顕著な研磨の痕跡は認められない。砂岩製。

第260号住居址 (Fig. 50.写真99~100)

前面のD-E-3・4区で検出した円形を呈する堅穴住居址である。調査区外にその一部がでる。北部は第139号井戸に破壊されている。直径3m強である。掘り方は残りのよいところで約20cmほどである。柱穴は北西に2個検出しているが、他は検出できなかった。遺物は中央東よりのところに土器の破片が集中して発見された。この部分は茶褐色の砂で、他の部分とは異なって

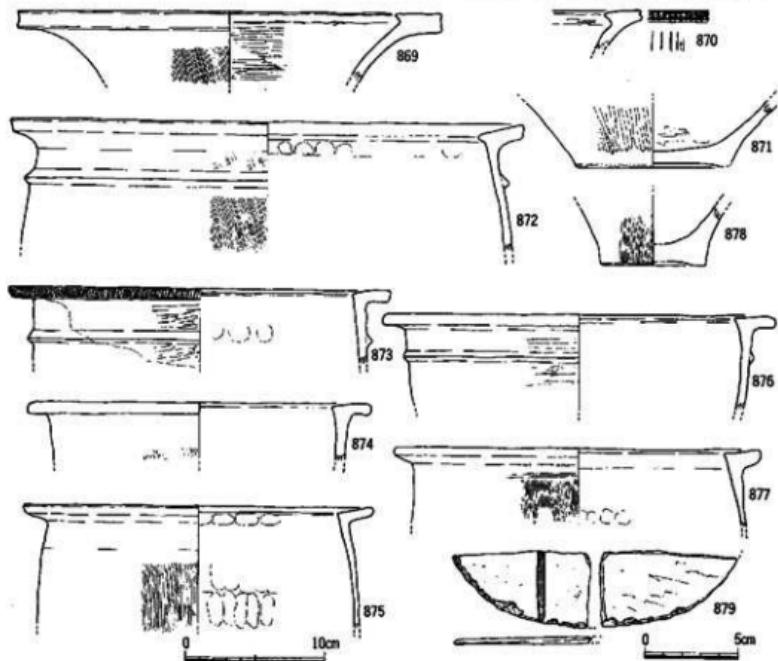


Fig. 49 第123号住居址出土遺物実測図 (1/4・1/3)

いた。これと離れて西に蓋の大きな破片と石庖丁があった。

出土遺物 (Fig. 51.880~890、写真101~103)

出土遺物には40点ほどの弥生式土器片と数点の各種石器がある。

880は大型の壺形土器の口縁部の破片である。口縁の形は逆「L」字形である。881は同じく壺形土器の口縁部の破片である。外面に刷毛目、内面に横方向のへら磨きの痕跡がある。882は鶴先状の口縁をもつ壺形土器の破片である。883は棒状の把手である。長さ3cmほどでかなり小型である。どのような器形の土器につくものかは不明である。同じような把手が、包含層から出土している (Fig. 54.895)。884は蓋である。大きな破片で、約2/3ほど残る。外面に縦方向の刷毛目が残る。直径26cm、高さ10cmを測る。885は逆「L」字形の口縁部をもつ壺形土器である。約1/2ほどの破片である。口縁の直径25cm、高さは24cmほどに復元できる。886は土製の投弾である。

887は砂岩製の外弯刃石庖丁である。刃は両面からの細かい剝離で形成されている。約2/5を欠く。紐孔は両面からの穿孔である。888は石鎌の破片である。石材は安山岩であろう。第257

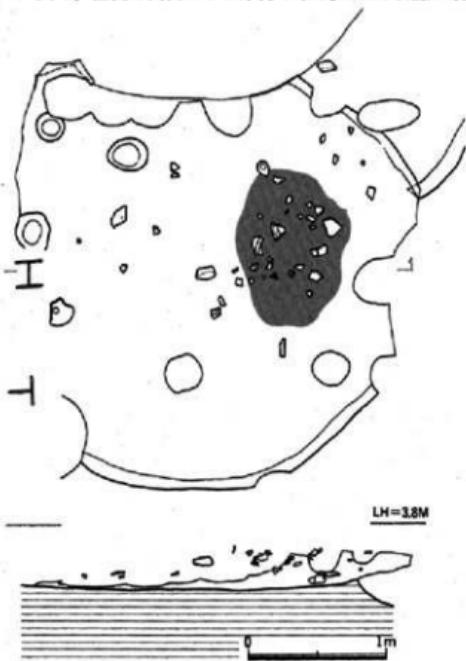


Fig. 50 第260号住居址実測図 (1/40)



写真99 第260号住居址(南から)



写真100 第260号住居址(東から)

号非戸の出土品と接合した。刃部は両面から研ぎ出す。先端を欠いている。889と890は砂岩製の用途の石製品である。889は棒状の形をもち、片方の端面には「X」字状の溝がある。890は梢円形の偏平な礫が半裁したもので、片面の中央に孔がある。また、同じ面には一条の縱方向の溝がある。

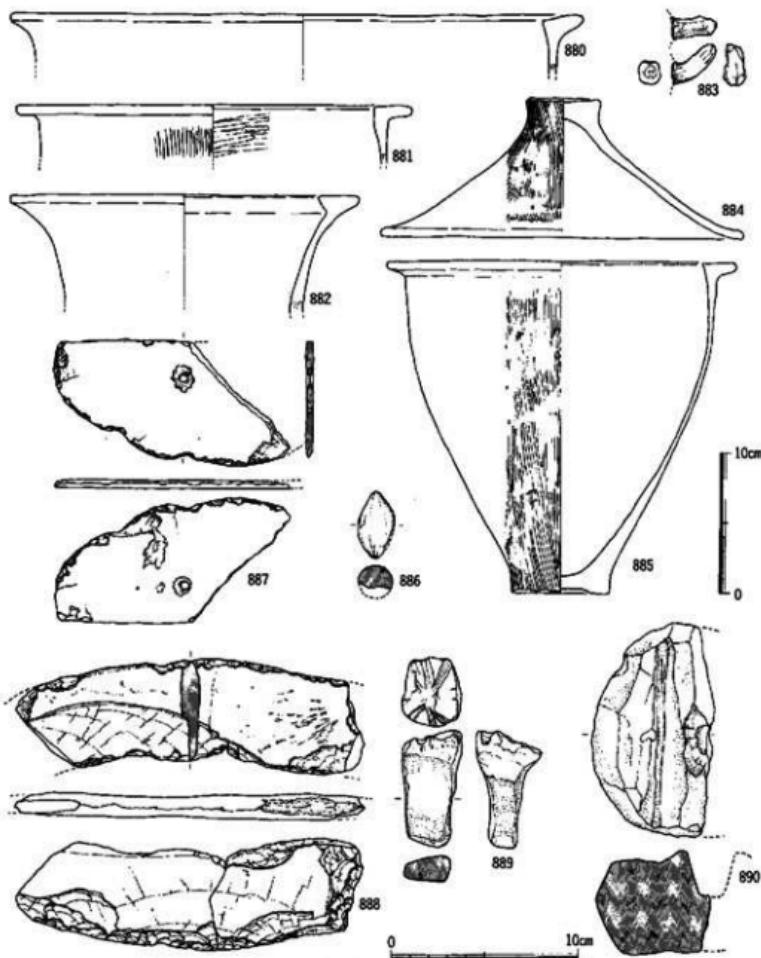


Fig. 51 第260号住居址出土遺物実測図 (1/4・1/3)

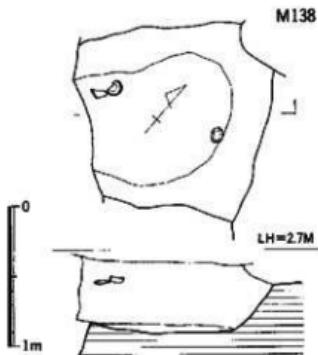


Fig. 52 第138号土壤実測図 (1/40)

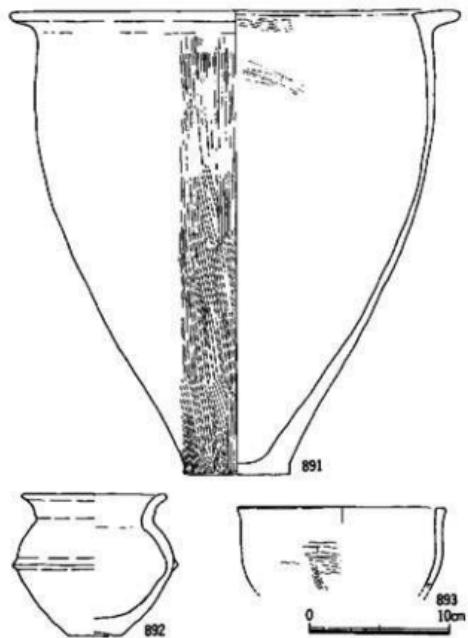


Fig. 53 第138号土壤出土遺物実測図 (1/4)

第138号土壤 (Fig. 52. 写真72)

III面のI面C・D-2・3区で検出した橢円形の土壤である。炭や灰の層が縦状に堆積しており、その中から中世の遺物が多量に出土した。しかし、その下部は淡茶褐色の不純物を含まない砂の層があり、その中から弥生時代の遺物が出土した。

出土遺物

(Fig. 53. 891~893、写真103)

3個体分の弥生式土器が出土した。891は逆「L」字形の口縁部をもつ壺形土器である。ほぼ全体を巡る破片があるが、部分的に欠落している。口縁部直径32cm、器高33cmに復元できる。892は小型の壺形土器で、胴部に一条の三角凸帯を巡らしている。口は外反する。底部はわずかに上げ底である。口縁部直径10cm、器高10cmを測る。893は壺の破片である。外面に横方向のヘラ磨きの痕跡が認められる。口縁部直径は15cmに復元できる。

その他の弥生時代遺物

(Fig. 54. 894~898、写真101・899)

ここでは、包含層およびその他の遺構から出土した弥生時代に属する遺物、主に石器について紹介する。

894は砂岩製の外湾刃の石庖丁の破片である。刃部は粗い剥離調

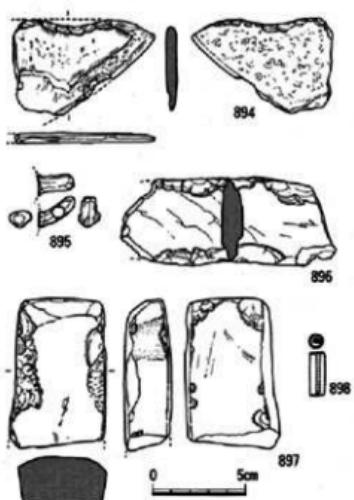


Fig. 54 包含層および各遺構出土
遺物実測図 (1/4・1/3)



写真101 弥生時代の石器

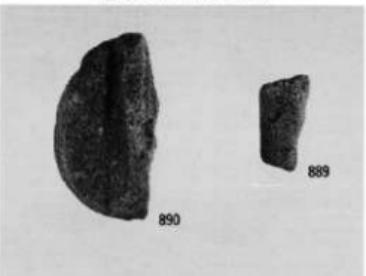


写真102 第260号住居址出土石器

整の後、両面から研ぎ出している。895は土製の把手である。断面は円形を呈する。896は安山岩製の石鎌の破片である。明確な刃部は残っていない。先端を欠損している。897は石斧の破片である。石材は玄武岩と思われる。一側面の上部が溝状に凹むことや断面形が長方形に近いことから柱状の片刃石斧である可能性もある。898は碧玉製の管玉である。井戸から出土した。899は灰緑色のチャートの剥片である。

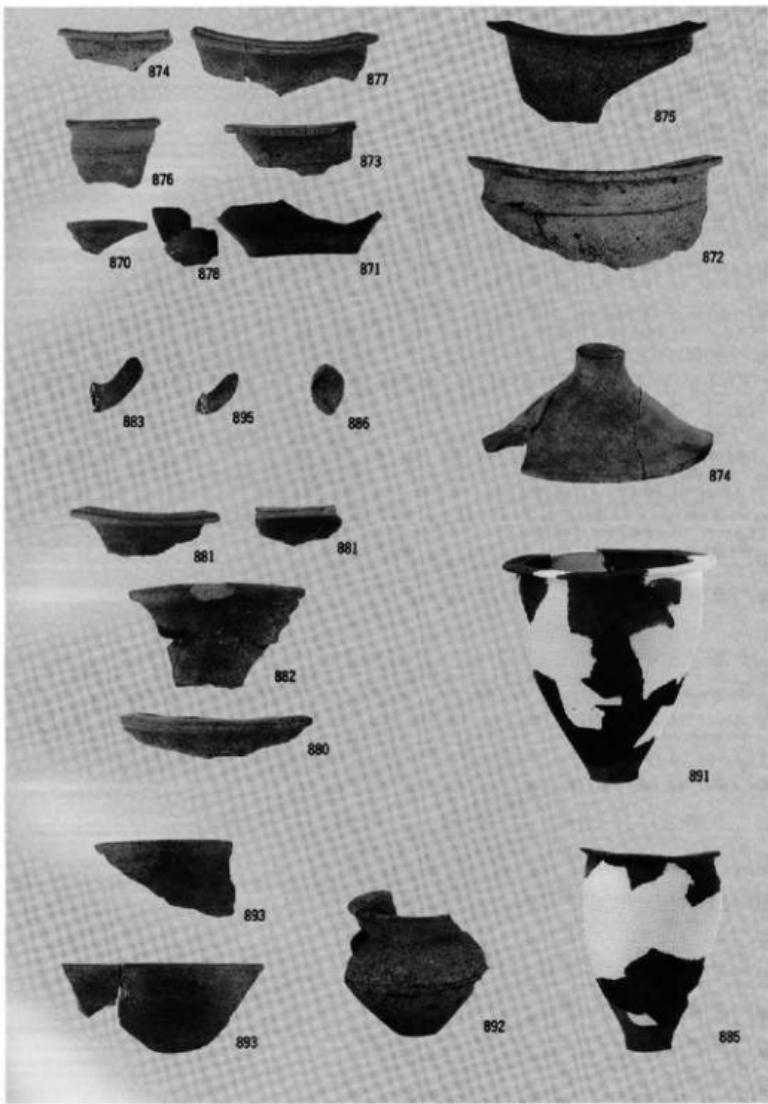


写真103 第123・260号住居址・第138号土壤出土遺物

第四章 まとめ

第23号溝について

真言宗の南岳山東長寺は、弘法大師空海が唐留学から帰国した第一歩を祐の浜に印した法縁の地として建立されたものが、1646年に今の地に移築されたものと伝えられる。「福博古図」(宝暦年間)による近世の町割では、西の第30次調査地点と本調査地点の境あたりが、御供所町と東長寺の境にあたる。後世の「山笠巡路博多古図」(文政6年)では、寺の南側は民地となっており、寺と町家の境の線が描かれている。この古図では、この境が妙乗寺の山門の前にあたる位置に描かれており、今回調査の第23号溝に符合する。この溝は16世紀後半代の遺物を含んでいるが、石組井戸を切ることや地下鉄関係調査の店屋町工区で発見されたこの溝に繋がると考えられる6号溝が17世紀に比定されていることなどから、東長寺がこの地に移転された時に築かれた境の溝であった可能性が高い。

第300号溝について

第35次調査では、道路遺構が発見されているが、これは辻堂口から承天寺門前と聖福寺門前を結ぶ中世後期の博多の幹線道路と目されている。64次調査でもこれに統く溝が発見されており、この道路の南端に相当するが発見され、これが太宰府へ通ずる府大道へ連なることがほぼ明らかになった。この道路は13世紀末から14世紀初頭の焼土の上に建設されており、16世紀末の太閤町割に至るまで継続して使用されていた。

今回調査区の北東側で現在の道筋に沿うN-40°-Wの方向をもつ2つの溝は、およそ11世紀後半から13世紀前半までの遺物を含んでいる。西側にある第290号溝は、第30次調査のSD-95へ繋がるものであろう。第300号溝は第30次調査では検出されておらず、調査区の東端をかすめて北西へ延びていくものと考えられる。さて、この溝と幹線道路との関係であるが、第300号溝は12世紀後半から13世紀前半までの遺物を主体とし、多量に廃棄された馬の頭骨などからこの場にはかなり埋立られた様相が認められる。これからすると、この溝は門前の幹線道路とは時期が異なり、その側溝とは考えがたい。この第300号溝に連なると考えられる溝は東長寺の北西の奥堂町で実施された第62次調査で検出されている。これは48次調査と同じく調査区の北東端で検出されているため、幹線道路との関係は不明であるが、道路の推定ラインとほぼ平行している。聖福寺の創建は1195年であり、この溝の構築時期とほぼ一致する。溝の東対は発見されていないが、おそらく道路の側溝として2本存在したことが想定され、この溝が聖福寺創建当初の門前道路の側溝であった可能が高い。溝幅も1m以上あったものと考えられ、14世紀以降の幹線道路の前身であったと思われる。ただし、この12世紀代の道路は、第35次調査地点や第64次調査地点では検出されていないため、北西と南東の延長部は不明である。ただし、64次調査

地点のより西に偏在して存在する可能性もある。また、この溝の延長と目されるところに、東長寺内で実施された第1次調査でも溝が1条検出されているが、調査者によると14世紀代に属し、より新しい道路面の側溝かもしれない。正式な報告が待たれる。

この幹線道路の作られる14世紀初頭の博多の大火や鎮西探題襲撃の戦禍による博多の町の荒廃依然には、博多浜には古代以来の南北・東西方向の溝が存在し、同じ博多浜において異なる町割りが併存していた。このような一見相いれない二つの町割りは、古代からの政治的な秩序（官衙・鎮西探題）と寺（聖福寺）という二元的支配（規制）に起因するものと考えられる。

町星について

13世紀後半から14世紀初頭の遺構が極めて多く、その種類も井戸やごみ穴、建物址、土間状遺構など町家の構造を復元できる資料を提示できた。しかし、その時期の間でも遺構の切り合がが多く、その作業を行う上で支障をきたしている。

道路は現在の道路からやや西よりに位置し、方位も西へ振れていたであろう。おそらく第3号溝よりわずかに東にあったものと考えられる。敷地は中世後期や近世の資料から推定すると、おそらく口が狭く奥行きの長い短冊形であったと考えられる。母屋は道に面しており、道の裏手側に土間が作られる。そしてその西側に井戸が掘られている。第30次調査地点でも、13世紀から14世紀代の井戸は調査区の北西半分に集中しており、この町家の位置関係はほかわからない。土筋皿廐棄場はこの土間遺構を切るものが多く、後にこのあたりが庭先に変化していくことが窺える。井戸は近代になるとより道路側の店先に作られるようになり、聖福寺前の花屋の店先にも博多最後の井戸がある。

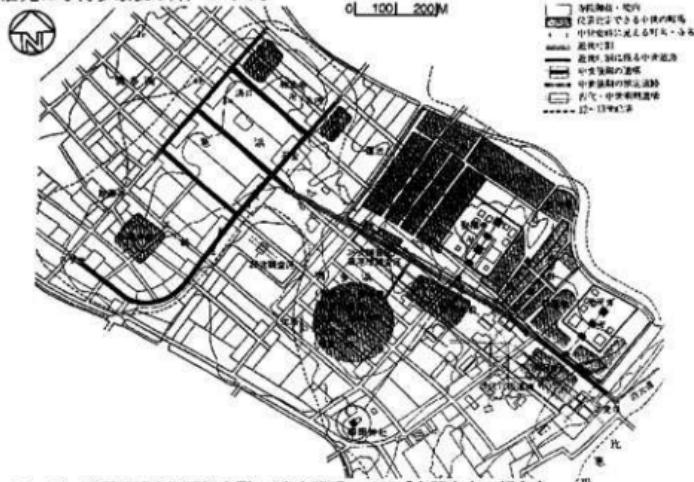


Fig. 55 戦国期博多概要推定図 (富本雅明 1989「空間志向の都市史」
「日本都市史入門」I 空間 原図に加筆・修正)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第282集

博多27

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-8-1)

発行年月日 平成4年3月13日

印刷 栄光印刷株式会社